資料１　令和３年度各事業報告書

アーティスト・イン・レジデンス事業	
基本的施策	2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 3　学校教育における文化芸術活動の充実 4　将来の文化芸術の担い手の育成 5　文化芸術活動を支える人材の育成 10　文化芸術による社会包摂 11　文化芸術に関する施策と生涯学習との連携及び強化 12　多様な分野との連携及びネットワークづくり 15　文化施設の活用
目　　的	国内を代表する実演家が地域に一定期間滞在し、地域の小学校でのクラスコンサートやワークショップ、そして環境の整った希望ホールでの公演を行うことで、 ・子どもたちが居住する地域・生活環境の差異無く、慣れ親しんだ環境で気軽に芸術にふれる機会を創出すること ・質の高い芸術を積極的に教育現場に取り入れ、子どもたちが芸術にふれる機会を創出することで、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を推進すること ・子どもたちの感性を刺激し、他者への寛容性、想像力、創造力、コミュニケーション力を育むこと ・実演家がアウトリーチで本市に滞在した後、再度本市を訪れ、希望ホールでのワークショップ、公演・リサイタルを行うなど、多角的に継続して市民に芸術の魅力を発信することで、１度限りの「点」ではなく、「線」から「面」へと繋がり広がる事業展開を図ること。
事業詳細等	別紙　〇アーティスト・イン・レジデンス（音楽）資料２ ページ 3~ 〇アーティスト・イン・レジデンス（ダンス）資料２ ページ 22~ 〇スタインウェイピアノ演奏体験･大ホール演奏体験 資料２ ページ 14~ （夏休み特別企画　中川賢一と学ぶスタインウェイ）

成果と課題	実演家は、国内外で活躍し、（一財）地域創造でのアウトリーチ事業の研修を受け、全国の自治体や学校での活動経験も豊富な、学校現場や子どもたちへの理解のある方を中心に招聘した。子どもたちの豊かな感性を刺激するため、歴史や人物（作曲家）についてや、普通の授業では知ることが難しい楽器の特性についての話など、単なるスクールコンサートとは違うプログラムを実施することにより、子どもたちの素直で新しい感情や反応を引き出すことができた。 クラシック音楽で多く実施する理由としては、ＪＡＺＺよりも難解ではなく、どこかで聞いたことがあるなど、意外と身近にふれる機会があり、また様々な楽器で演奏されることから、子どもたちにとって想像力を喚起する音楽ジャンルとして、全国の学校現場でのワークショップやクラスコンサートで広く用いられている分野であることと、庄内地域はピアノや合唱、吹奏楽に取り組む学校や市民、団体も多く存在すること等があげられる。 ダンスについては、存在するだけで身体表現になるという、ダンスの特性・魅力から、特別支援学校を対象としたワークショップを含めて、幅広い市民を対象とした事業を実施することができ、自己肯定感や自身・他者の魅力の気づき、他者の寛容を体験できる場の創出に繋がった。 また全体として、実演家が滞在し一緒に作品を創る本事業を実施したことにより、希望ホールテクニカルスタッフの意識や技術の向上が見られたことも、人材育成の観点から大きな成果となった。 令和 4 年度以降は、引き続き実演家が一定期間滞在（レジデンス）し、公演やワークショップを開催。地域の市民とのふれあいを通じて、実演家と市民双方が酒田市の魅力を発見し、発信する取り組みを展開する。 クラスコンサートについては、小学校を卒業するまでにすべての子どもたちが一回は一流の芸術にふれる機会を持つことを重視。またコロナ禍の影響もあり、令和３年度は実施できなかった 3 支所管内でのミニコンサートも実施予定である。それにより、すべての市民が等しく一流の芸術にふれる機会を創出する。地域の文化施設やコミュニティセンターなどを活用することで、地域の魅力や可能性に気づき、地域のブランディング、シビックプライドの醸成にも繋げていきたい。 また昨年度より、市内高校演劇部から演劇事業実施についての要望も届いており、芸術の多様性という観点＝社会包摂の観点からも、音楽・ダンスに加えて演劇に関するレジデンス事業を実施する方向である(（一財）地域創造の助成金プログラム「リージョナルシアター事業」を活用予定)。 なお、来年度はより親しみやすい事業名称とする予定。

アーティスト・イン・レジデンス事業（音楽）

基本的施策	2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 3　学校教育における文化芸術活動の充実 4　将来の文化芸術の担い手の育成 5　文化芸術活動を支える人材の育成 10　文化芸術による社会包摂 11　文化芸術に関する施策と生涯学習との連携及び強化 12　多様な分野との連携及びネットワークづくり 15　文化施設の活用
目　　的	国内を代表するアーティストが地域に滞在し、小学校のクラスコンサートやワークショップ、環境の整ったホールでの公演を行うことで、市民・地域との交流を図り、芸術にふれる機会の提供のみならず、芸術の多様性を共有し、芸術を通じた地域全体の発展、人材育成を目的とする。

日　　時

アーティスト（50 音順）	アウトリーチ	アナリーゼ ワークショップ	コンサート
髙橋和貴（ヴァイオリン）	10 月 17 日(日)～22 日(金)	10 月 20 日(水)	令和 4 年 2 月 27 日(日)
高橋多佳子（ピアノ）	8 月 31 日（火）～9 月 3 日（金）	令和 4 年 1 月 14 日(金)	令和 4 年 1 月 15 日(土)酒田公演 令和 4 年 1 月 16 日(日)鶴岡公演
中川賢一（ピアノ）	10 月 25 日（月）～28 日（木）	10 月 29 日(金)	11 月 26 日(金)
仲道郁代（ピアノ）	―	12 月 21 日(火)	令和 4 年 2 月 19 日(土)
新野将之（打楽器）	10 月 3 日(日)～8 日(金)	10 月 8 日(金)	11 月 7 日(日)

対　　象	○アウトリーチ アーティストの話や音楽用語の説明、歴史等を一定程度理解できる学年として市内小学 5 年生を対象に設定した。学校や地域によって子供たちに生じる「芸術にふれる機会の格差」を是正し、子供たちが小学校を卒業するまでに一度は一流の芸術にふれる機会を得られるよう、酒田市内全校（令和 3 年度は 22 校中 21 校実施）を対象として実施した。 ※学校によっては学級編成の都合上、複式学級で実施。

対　　象	○アナリーゼワークショップ コンサートとセットで楽しんでもらうため、コンサートチケット提示で無料とした。 ○コンサート どなたでも（未就学児不可） ※若い世代にも広く芸術にふれてもらうため U-25（公演当日 25 歳以下※身分証提示）を半額にしたほか、アウトリーチ参加児童に希望ホールでの鑑賞体験をしてもらうため無料招待とした。
会　　場	○アウトリーチ：各小学校音楽室 ※学校によっては体育館・パソコン室 ○コンサート及びアナリーゼワークショップ：希望ホール ※高橋多佳子リサイタル鶴岡公演：荘銀タクト鶴岡 ※高橋和貴アナリーゼワークショップ：酒田市総合文化センター
事業内容	○アウトリーチ 市内全小学校の 5 年生全クラスを対象に、アーティストの演奏を間近で聴き、アーティストとの対話をとおして、卒業までに必ず一度は一流の芸術にふれる機会を創出する。 ○アナリーゼワークショップ コンサートプログラムの楽曲分析、作曲家の人物像、当時の時代背景などを、アーティスト本人が演奏を交えながら解説する。 ○コンサート アーティストの本来の魅力を音響などの環境が整ったホールで体感してもらう。

参加者及び入場者数

1.アウトリーチ参加者数・うちコンサート来場者数

アーティスト（楽器）	学校	参加人数	コンサート来場者数	備考
髙橋和貴（ヴァイオリン）	泉小学校	60	1	2 クラス
	南平田小学校	30	0	
	十坂小学校	27	0	
	松原小学校	60	6	3 クラス
	鳥海小学校	33	2	
	合計	210	9	
高橋多佳子（ピアノ）	一條小学校	31	0	オンライン実施
	琢成小学校	27	1	直接実施
	八幡小学校	28	1	オンライン実施
	松山小学校	15	3	オンライン実施
	合計	101	5	
中川賢一（ピアノ）	富士見小学校	52	6	2 クラス
	広野小学校	16	6	
	浜中小学校	16	4	
	亀ケ崎小学校	90	18	3 クラス
	西荒瀬小学校	24	3	
	黒森小学校	7	0	5・6 年生 2 クラス
	合計	205	37	
新野将之（打楽器）	宮野浦小学校	66	9	4 年生 2 クラス
	松陵小学校	34	3	
	田沢小学校	20	0	全校児童
	新堀小学校	14	3	
	若浜小学校	62	9	2 クラス
	浜田小学校	38	2	
	合計	234	26	
合計		750	77	

※令和 3 年度は 22 校中 21 校の実施

【傾向】コンサートとアウトリーチの日程の間隔が開いたものは参加者が少なく、近いものは比較的、コンサートの来場につながった。

2. アナリーゼワークショップ入場者数

開催日	アーティスト	総入場者数	当日券	コンサートチケット提示者数	U-25	アンケート回収率
10 月 8 日(金)	新野　将之	51	29	8	15	76%
10 月 20 日(水)	髙橋　和貴	26	8	17	1	54%
10 月 29 日(金)	中川　賢一	21	10	6	5	71%
12 月 21 日(火)	仲道　郁代	107	18	90	9	76%
令和 4 年 1 月 14 日(金)	高橋　多佳子	43	5	37	1	86%
		248				

3. コンサート入場者数

開催日	アーティスト	総入場者数	一般	U-25	招待券（協賛企業）	アウトリーチ参加児童	アンケート回収率
11 月 7 日(日)	新野　将之	168	120	19	3	26	80%
11 月 26 日(金)	中川　賢一	166	107	15	7	37	69%
令和 4 年 1 月 15 日(土)	高橋　多佳子 【酒田公演】	222	201	13	2	6	55%
令和 4 年 1 月 16 日(日)	高橋　多佳子 【鶴岡公演】	212	194	13	5	0	71%
令和 4 年 2 月 19 日(土)	仲道　郁代	388	360	22	6	0	64%
令和 4 年 2 月 27 日(日)	髙橋　和貴	170	150	7	6	7	60%
	合計	1326	1132	89	29	76	

事業詳細 アウトリーチ ※実施校の中から一部報告	高橋多佳子(ピアノ)アウトリーチの様子（酒田市立松山小学校５年生：９月３日実施） ショパン国際ピアノ・コンクール５位入賞のピアニスト高橋多佳子氏によるアウトリーチは、感染症対策のため４校中１校が学校での実施、３校がオンラインでの実施となった。オンライン上でも通信環境に左右されず、途切れることなく上質な演奏を児童に届けるため、前日に実際に希望ホールで演奏した様子を撮影・編集した動画を流し、当日はリアルタイムでも児童たちがいる音楽室と高橋氏がいる希望ホールの小ホールを繋いで中継した。画面越しでもスムーズにコミュニケーションをとることができ、音楽に親しんでもらうことはもちろん、児童がアーティストとふれあえた機会となった。 児童たちが高橋氏の演奏を聴いて感じるイメージについて「明るい感じ」「オレンジ色の感じ」など思い思いに発表すると、高橋氏は「音楽は、聴く人が感じてくれるそのものが正解なので、ぜひ思いを膨らませて聴いてほしい」と笑顔で語った。その他、作曲家やピアノの奏法や仕組みについてのお話もあり、児童たちは時折頷きながら聞いていた。 リモートでの実施ではありながらも、アーティストの人柄も音楽の楽しさも感じることができ、音楽で児童たちとアーティストが間近につながることのできた機会となった。 新野将之(打楽器)アウトリーチの様子（酒田市立新堀小学校５年生：10 月６日実施） 国内外のコンクールで多くの受賞歴を重ね（一財）地域創造公共ホール音楽活性化事業アーティストとしても活動する打楽器奏者の新野将之氏がアウトリーチを実施した。 初めは緊張した面持ちの児童たちも、迫力のある打楽器の音楽と新野氏のお話にだんだんと打ち解けていき、演奏に夢中になっていった。 ワークショップでは、演奏を聴いて感じたイメージを児童たちが紙に描いた。演奏が始まると、初めは少し悩んでいた児童も筆を手に取り、思い思いに自分の感じたイメージを紙に表現した。新野氏は児童の絵を見て「すごい！」「いいね！」と児童一人ひとりに温かい声をかけていた。新野氏は「同じ曲を聴いても、人によって違う感じ方をする。他人の感じ方が自分と違っても、お互いを認め合えるのが音楽の魅力。正解を考えずに自分の感じたことを素直に受け止め、他の考えも認め合える人になってほしい」と児童たちに語りかけた。

感想 アウトリーチ	【先生より】 ○体育館を半日取られるとなると実施が難しいが、音楽室でかつ 1 コマなら可能。子供との距離も近く、児童たちが入りこんでいく様子がうかがえる。日常で使っているピアノや音楽室で全く違う音を体験できてよかった。 ○特別支援学級の子が 1 人いたが、久しぶりに笑顔が見られた。普段は教室に入れない児童もこの時間だけは一緒に聴いて、以前までのいい笑顔を見せていた。 ○普段は落ち着きのないクラスなのに、45 分間ずっとアーティストに集中していることに驚いた。 ○これまでもスクールコンサートを実施したことはあるが、クラス単位で質の高いアーティストとふれあえるタイプの体験は初めてで、とても素晴らしい体験ができてよかった。来年以降もぜひ続けて欲しい。 【児童より】 ○曲を作った人は曲一つ一つに感情や思いを込めて作ったのだとわかった。 ○いろんな曲が弾けてすごいと思った。私も弾いてみたい。 ○打楽器の種類がたくさんあってびっくりした。 ○ヴァイオリンを弾くのは簡単だと思っていたけど難しかった。 ○ピアノの仕組みを知ることができてよかった。
成果と課題 アウトリーチ	○普段の授業で児童が使用する音楽室を会場にしてクラスコンサートを実施することで、より身近に、リラックスした状態で児童に一流の演奏にふれてもらうことができた。感染症対策のため、やむを得ず体育館での開催となった学校もあったが、可能な限り音楽室での実施としたことで、児童とアーティストが近い距離でふれあうことができ、より良い音響で演奏を届けることができた。 ○どのアーティストも児童との対話に重点を置いていたため、単なるクラスコンサートの鑑賞ではなく、アーティストが対話によって児童の感受性を引き出したり、1 対 1 で楽器の奏法を教えてもらったりするなど児童とふれあえる機会となった。 ○曲の聴き方・感じ方は正解が決まっているわけではなく、自由に聴いて良いのだというメッセージを児童たちに伝えるアーティストもおり、他の科目と異なり正解のない芸術だからこそ、児童の多様性を育める機会となった。 ○感染症対策として、アーティストのＰＣＲ検査の実施、児童とアーティストとの間へのパーテーションの設置、アーティストのマスク着用、使用後の室内消毒などを徹底した。 ○年度に入ってからのスケジュール調整は事務局、学校側双方で苦慮したため、令和４度以降はこれまでよりも計画的に調整を行っていく。

事業詳細 アナリーゼワークショップ	仲道郁代アナリーゼワークショップの様子（12 月 21 日実施） 文化活動に優れた成果をあげ、国の文化の振興に貢献した人に贈られる文化庁長官表彰のほか、令和 3 年度文化庁芸術祭において大賞を受賞した仲道郁代氏。リサイタルでオール・ベートーヴェン・ソナタプログラムを演奏する同氏のアナリーゼワークショップでは、ベートーヴェンが曲中で使用する短い一節（モチーフ）について取り上げた。 それぞれの曲についてモチーフが曲中で様々な形に変化して登場するが、その変化の様相を辿っていくことで、ベートーヴェンの想いや考えなど、表現したかったことが分かるのだと説明した。会場には 100 名を超える観客が熱心に頷きながら聴いており、中には持参した楽譜を辿りながら聴く人もいた。 仲道氏は、「ベートーヴェンは論理的にモチーフを組み立て、その全てに意味を持たせて作品を書いた。それぞれのモチーフの意味を推理しながら楽譜を見ていくととても面白い」と話した。 髙橋和貴アナリーゼワークショップの様子（10 月 20 日実施） 山形交響楽団ソロ・コンサートマスターである髙橋和貴氏、ピアニストの三輪郁氏、そして山形交響楽団専務理事である西濱秀樹氏を迎え、２月の公演のプログラムやヴァイオリン・ピアノの楽器について、演奏に解説を交えたアナリーゼワークショップを開催した。 西濱氏の司会で、ピアノとヴァイオリンの歴史について三輪氏、髙橋氏とともに辿った。ピアノは、時代の変遷とともに徐々に現代の形に近づいていくのに対し、ヴァイオリンは、ストラディバリウスの時代（1700 年代）にほとんど完成されたということを解説した。その他にも、プログラムを選んだ意味や、モーツァルト、ベートーヴェンそれぞれの時代のヴァイオリン・ソナタの特徴の変遷についても演奏を交えながら話した。

感想 アナリーゼ ワークショップ	○素晴らしいアナリーゼでした。こういう話を聞きたかった！コンサートが楽しみになった。ベートーヴェンの凄さがより理解できた。 ○アナリーゼに初めて来た。ただ音楽だけ聴いているのでは分からない作曲家の思いやそれを表現する演奏家の思いなど、とても面白く聞かせてもらった。 ○コンサート前にこの様な形で解説いただけるということで、ますますコンサートが楽しみになった。 ○本番が楽しみ。今日聞いたようなお話を教えて頂くことはめったにないので、とても面白かった。贅沢なひとときだった。 ○アナリーゼワークショップに参加したのは初めて。色々なお話を伺えて、そして、コンサートという流れ、とても嬉しく参加させていただいた。
成果と課題 アナリーゼ ワークショップ	○公演で演奏されるプログラムについて、その曲目の聴きどころやその曲が作曲された背景、作曲家について、演奏家本人が分かりやすく解説した。希望ホールでは初めての試みであり、演奏する本人からそのような話を聴けるのはとても貴重な機会だと喜びの声が多く聞かれた。 ○アーティストによって取り上げる題材が、曲の書かれた背景や作曲家の人生、奏法、曲を形成する旋律や和音などとそれぞれ異なっており、毎回アーティストの特色を感じられる全く違ったアナリーゼとなった。 ○初めは「アナリーゼワークショップ」という名称について、参加型なのか？難しいのでは？と感じ参加をためらったという声も聞かれたが、回を重ねるごとに参加者も増え、催し自体を市民に浸透させることができた。 ○リサイタルとは異なり、質問コーナーを設けるなど、市民とアーティストがふれあう場面も設けたことで、アーティストをより身近に感じてもらうことができ、アーティストの人柄を知ったことでファンになったという方も多かった。 ○コンサートチケットを提示すると無料で入場できるため、コンサートと併せて参加するお客様も多かったが、アナリーゼの当日券を購入するお客様も一定数いた。年度途中でリサイタルチケットにもアナリーゼワークショップについて記載をするようにしたが、リサイタルとアナリーゼワークショップがセットの催しであり、チケット提示で無料で参加できるということが浸透していけば、来場者数の増加につながる。 ○アナリーゼワークショップの様子を記した活動レポートを毎回作成したが、活動レポートの公開をＳＮＳで周知するなど、単に作成するだけでなくリサイタル自体の広報に繋げるという点を強化する必要がある。 ○初心者でも楽しめるとＰＲをしたが、アーティストによっては難解な内容になった回もあった。しかし、アートに親しむ層の拡大という「育成」の観点からも、初心者からアートに親しみがある人まで楽しんでもらえるよう（新規観客の開拓と常連化）、今後アナリーゼワークショップを含めたアーティスト・イン・レジデンス事業を継続させていくことが重要である。

事業詳細 リサイタル	高橋多佳子ピアノ・リサイタル酒田公演(令和 4 年 1 月 15 日) ・鶴岡公演(令和 4 年 1 月 16 日)の様子 高橋多佳子氏によるアナリーゼワークショップ、酒田公演、鶴岡公演（荘銀タクト鶴岡）の 3 日連続の催しを実施した。3 事業全てに参加した方、市外・県外から来場された方も多く、本事業を通じて「初めて希望ホール/荘銀タクト鶴岡に来た」「聴き比べできた」など地域の交流や活性化にも大きくつながる取り組みとなった。 15 日（土）の酒田公演では、昨年 11 月に東京文化会館で行われたデビュー30 周年記念公演と同様のプログラムが演奏され、東京公演と同様のプログラムを地方で聴くことのできる貴重な機会となった。「新しき道　Neue Bahnen」は、シューマンがブラームスを世に紹介した音楽雑誌の記事の表題であり、高橋氏にとってもブラームスは新たな挑戦となることから付けられたタイトルで、その叙情的な旋律に会場中が惹きこまれた。16 日（日）の鶴岡公演「オール・ショパン・プログラム」では、ショパン国際ピアノ・コンクール入賞歴をもつ高橋氏の真髄を堪能できるプログラムであった。高橋氏によるショパンの生涯や曲に込めた想いについてのお話も交えながらの演奏会となった。 中川賢一ピアノ・リサイタルの様子(11 月 26 日) 8 月には「中川賢一と学ぶスタインウェイ」の一連の事業を、10 月には市内 6 校へのアウトリーチ・アナリーゼワークショップを行った中川賢一氏が、地域での活動の締めくくりとして希望ホールでのリサイタルを開催した。 ドビュッシーの前奏曲集は 12 曲それぞれに題名がついているが、中川氏は「題名通りに感じなくてもいいし、むしろ新しい題名を考えてもらってもいい。ぜひ、自由に一瞬一瞬の響きを楽しんでもらえたら。」と話した。中川氏の言葉どおり、自由で鮮やかな和音の数々にお客様は時折目を瞑りながら聴き入っていた。地方ではあまり聴く機会の少ない珍しいプログラム構成に対して、喜びの声も多く聞かれた。 その他、中川氏が事前に録音した自身の演奏とのコラボレーションで贈る「ピアノ・フェイズ」や、ラフマニノフの人生が顕著に表れているともいえる「前奏曲 作品 3-2『鐘』」、「前奏曲　作品 32-13」など、重厚な響きが会場中に響き渡った。

感想 リサイタル	○アナリーゼの解説を聞いて当日の演奏をより深く楽しめた。（髙橋和貴） ○アウトリーチを体験した子どもの希望で、初めて家族でコンサートに来たが、とても楽しかった。（髙橋和貴） ○アーティストのショパンへの深い愛情を感じる演奏で本当に素晴らしかった。（高橋多佳子/酒田） ○この素晴らしいコンサートを安価で聴くことが出来てとても嬉しい。普段のコンサートは金額的に家族で聴くことが難しいが、今日は家族と一緒に聴けるのでこうした機会が増えてほしい。（高橋多佳子/鶴岡） ○ぜひまた山形でコンサートをしてほしい。（中川賢一） ○今年にかけて質の高いクラシック演奏が聴けて大変ありがたい。（中川賢一） ○ピアノが流れたとたん涙が出る演奏だった。（仲道郁代） ○分かりやすい曲の解説でとても楽しく聞かせていただいた。しなやかさの中に力強い演奏が素敵だった。（仲道郁代） ○演奏はもちろん、アーティストの人柄を知りファンになった。（新野将之） ○人生で初めてコンサートに来たが、最初が新野さんで良かったと思えた。（新野将之）
成果と課題 リサイタル	○それぞれのアーティストが、それまで実施してきたアウトリーチ、アナリーゼワークショップの一連の事業の締めくくりとしてリサイタルを開催したことで、子どもたちが親や兄弟などを連れて初めて希望ホールに足を運んだ、アナリーゼに参加したクラシック音楽ファンが、一流の演奏家が小学校へ演奏活動に赴いていることに感銘を受けた、など、事業成果が「点」にならずに、「線」、「面」と、つながりと広がりが生まれた。 ○国内を代表するアーティストによる圧巻の演奏と、多様な芸術の魅力にふれる機会を市民に提供できた。「これまではクラシックの鑑賞事業が少ないと感じていたので嬉しい」「コロナ禍の中で久しぶりに生の音楽が聴けて活力になった」という声が多く聞かれた。 ○小学校アウトリーチを受けた児童も合計 76 名が入場した。同様にアウトリーチを行う他館では子どもたちの来場が一桁ということもあることから、今年度の酒田市の取り組みの成果の大きさがわかる。ホールでの鑑賞体験では、音楽室で体験したものとはまた違った、アーティスト本来の魅力にふれてもらうことができた。 児童の家族には希望ホールに初めて足を運んだという方もいて、市民にホールに親しんでもらうきっかけとなった。 ○アナリーゼワークショップと併せて参加した方も多く、演奏家自身の言葉でプログラムの聴きどころを聞いたことによって、よりリサイタルを楽しむことができたとの声も多く聞かれた。 ○コロナ禍での開催となり、国（全国公立文化施設協会）のガイドラインよりも厳しい客席設定（一席空け、５０％販売）で実施したことにより、来場者が安心して鑑賞する機会を設けることができた一方、完売公演ではより多くのお客様にお越しいただく機

	会を制限することとなり、また発券数に対して当日来場しない方も一定数いるなど、コロナ禍での集客について、来年度は全国の状況をより冷静に見極める必要があると同時に、コロナ対策の周知（情報発信）を強化していく必要がある。 〇高橋多佳子氏の一連の事業では、荘銀タクト鶴岡と連携して制作・広報を展開したことで、それぞれのホールの集客増加だけでなく、地域全体として多くの市民の方が広く文化にふれることのできる機会を生み出すことにつながった。また、両館のスタッフが交流する機会にもなり、ホール同士の情報共有をすることもできた。 〇今年度からスタートした取組みであり、またコロナ禍ということもあり、情報が行き届く時間や手段が足りず、アーティストによって入場者数にばらつきがあった。それぞれのアーティストの魅力を発信するＰＲをより強化していく必要があり、担当課としてその重要性を粘り強く市に説明していくことが求められる。 アウトリーチやアナリーゼワークショップで普段クラシック音楽になじみのない人にも裾野を広げながら、コアなクラシック音楽ファンにもリピーターになってもらい、地域にアーティスト・イン・レジデンス事業が浸透していくよう継続していく必要がある。

スタインウェイピアノ演奏体験・大ホール演奏体験 （夏休み特別企画　中川賢一と学ぶスタインウェイ）	
基本的施策	2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 4　将来の文化芸術の担い手の育成 5　文化芸術活動を支える人材の育成 10　文化芸術による社会包摂 15　文化施設の活用
目　　的	例年実施してきた、スタインウェイピアノの演奏体験に加え、ピアニスト中川賢一氏によるスタインウェイピアノの仕組みや歴史を学ぶ特別講座と、公募の受講生への個人レッスンの公開を合わせて実施することで、プロのピアニストの多くが愛する名器スタインウェイ製のフルコンサートピアノそのものや、ピアニストから見たピアノの特徴やその魅力を学ぶ場を提供する。地域の財産であるピアノのについて深く学ぶことで、ホールやピアノへの愛着を持っていただく。
日　　時	○特別講座　ピアノを解体！？～スタインウェイの仕組みと歴史～ 8月1日（日）午前10時～午前11時30分 ○中川賢一　公開レッスン 8月1日（日）午後1時～午後6時 ○受講生による発表公演 8月3日（火）午後1時～午後3時 ○スタインウェイピアノ演奏体験 8月4日（水）午前9時30分～午後5時20分
対　　象	○特別講座　ピアノを解体！？～スタインウェイの仕組みと歴史～ どなたでも（要事前申込） ○中川賢一　公開レッスン 山形県内在住の小学生～大学生まで（プロ・セミプロを除く）で特別講座・公開レッスン・発表の全ての日程に参加可能な方。（要事前申込） ※申込書・推薦書を提出すること。 ○受講生による発表公演 公開レッスンの受講生 ○スタインウェイピアノ演奏体験 特別講座に参加された方のうち、事前に演奏体験を希望した方（ピアノ未経験者と公開レッスン受講生を除く）。
会　　場	希望ホール大ホール

<table>
<tr><td colspan="2">事業内容</td><td>○特別講座　ピアノを解体！？～スタインウェイの仕組みと歴史～
スタインウェイピアノの構造や歴史、魅力を中川氏が分かりやすく解説するワークショップ。
○中川賢一　公開レッスン
公開で行う中川氏による個人レッスン。
※参加申し込みのあった 12 名から 6 名を選出。
○受講生による発表公演
公開レッスンの受講生による演奏公演。
○スタインウェイピアノ演奏体験
特別講座に参加された方のうち、事前に演奏体験を希望した方を対象としたスタインウェイピアノの演奏体験。</td></tr>
<tr><td colspan="2">講　師</td><td>中川賢一（ピアニスト）
高橋俊樹（調律師）※特別講座のみ</td></tr>
<tr><td rowspan="4">事業関係者数</td><td>参加者数</td><td>○特別講座+公開レッスン（同日開催）
入場者 76 名
○公開レッスン受講生・受講生による発表公演
入場者数 20 名　受講生 6 名+特別枠 1 名
○スタインウェイピアノ演奏体験
参加者 9 名</td></tr>
<tr><td>講師</td><td>1 名</td></tr>
<tr><td>スタッフ</td><td>6 名</td></tr>
<tr><td>総数</td><td>114 名</td></tr>
</table>

事業詳細	8 月 1 日（日）から 3 日間、「夏休み特別企画　中川賢一と学ぶスタインウェイ」と題し、これまで希望ホールで多くの感動を生んできたスタインウェイピアノの歴史と魅力に迫る特別講座「ピアノを解体！？～スタインウェイの仕組みと歴史～」と、県内から募集・選考した未来のピアニストたちを対象にした公開レッスン・発表公演を実施した。 〇特別講座「ピアノを解体！？～スタインウェイの仕組みと歴史～」 8 月 1 日（日） 中川氏、調律師の高橋氏を講師に、2 部構成でスタインウェイピアノについて学んだ。 第1部　ピアノの秘密 スタインウェイピアノを解体。ビデオカメラで中川氏の手元やピアノの内部を撮影しながら、その映像をリアルタイムで大ホールの大きなスクリーンに映し出していく。鍵盤の中を表した模型であるアクションカットモデルを使ったり、調律師が実際にピアノを分解（鍵盤の取り外し）したりして、鍵盤を押してから音が出るまでの仕組みを確認した。その後、オルゴールを使って、オルゴールから流れる小さな音が、響板にオルゴールがふれると大きな音に拡張される様子を見て、響板をはじめピアノ全体が音を響かせていることを確認。参加者からは「え！すごい！」など驚きや関心の声が聞こえた。第一部の最後には、弦の上に大量のピンポン玉を乗せて中川氏が演奏。ピンポン玉が次々に跳ね飛ぶ様子から、弦の振動を分かりやすく学んだ。 第2部　スタインウェイを知ろう スタインウェイピアノを作っているのは、スタインウェイ・アンド・サンズ。ドイツ人のピアノ製作者ハインリッヒ・エンゲルハルト・シュタインヴェーク（後のヘンリー・スタインウェイ）氏が 1853 年 56 歳の時に設立した製造会社。社名にもあるように、彼の息子たちもピアノ制作に関わっていて、より音を響かせられるような数々のパーツを生み出し特許を取ったり、2,500 人もの人を収容できるホールを造りピアノの素晴らしさを多くの人に発信したりしていた。 その後、話はそれぞれのパーツの特徴の解説へ。薄い十数枚の良質な木の板をにかわで

	貼り合わせてできた1枚板の合板を、ピアノの型に 2 時間押し当てた後、2 週間程度乾かして作るのが特徴のリム。それを製作している様子や構造を他社のリムと比較しながら詳しく学んだ。その後も同様に金属フレームや支柱、響板などと、写真や図を交えながらその特徴を学び、スタインウェイピアノが多くの人から愛される理由を紐解いた。 「特別講座で講師を務めるために、ピアノの構造・パーツについてや、ピアノができるまでに関わってきた人の歴史などを、改めてじっくり勉強してきた」と中川氏。演奏家ならではの視点で、スタインウェイピアノの音の響きの良さや弾きやすさを解説し、演奏家にとって特別感のあるピアノであることを伝え、希望ホールの構造自体もピアノの音をより引き立てるものであることを解説した。 〇公開レッスン 8 月 1 日（日） 県内の小学生から大学生を対象に募集した中から、6 名の受講生を選考し公開レッスンを実施。12～15 歳の計 6 名の受講生のほか、特別枠として 8 歳の男の子も参加し、計 7 名でのレッスンとなった。 まずは受講生本人が選曲してきた曲を一度演奏。その後、中川氏は、「この部分は、こんな風にお花がぽっと咲いていくようなイメージで」などと、演奏を交えながら中川さんの持つ曲のイメージを共有したり、「間違ってもいいから響かせてみよう。ペダルをこう踏んだら響くんじゃないかとか、色々試してみよう」など音の響かせ方を一緒に探ったりしながら演奏するうえでのポイントを丁寧に指導した。「楽譜にはたくさんのヒントがある。自分で何度も弾いて気づくことが必要」と楽曲との向き合い方も伝えた。 始めは緊張した様子の受講生たちも、中川氏の一人ひとりの特徴に合わせたレッスンを受けて、レッスンを受ける前と後では明らかに演奏表現が豊かになる様子がうかがえた。

〇発表公演
8 月 3 日（火）
中川氏のレッスンを終えた 6 名の受講生による発表公演を実施。この日は中川氏が客席で見守る中、レッスンの成果を発表した。短時間のレッスンだったが、各々がレッスンで吸収したことを演奏に込め、技術だけでなく、音の響きや表現力の豊かさを増した素敵な演奏を披露した。

受講生からは、「曲を書いた時の作者の状況やその時代背景を知ることで、どのような気持ちや雰囲気で演奏すると良いか考えることができた」「今までは大ホールは本番でしか使わず、緊張してばかりだったが、レッスンを受けてさらに響かせる奏法を中川氏に教えていただくことで音の響きを感じられ楽しかった」などの感想が寄せられた。

終演後、中川氏と受講生で行った振り返りでは、中川さんから受講生たちへ、「レッスンを通して、みなさん日頃からよく練習されていると思った。こういった大きなホールで

	演奏する際は、音の響きを意識してみてほしい。みなさんがレッスンを通して、それぞれが何か学びに繋がってくれたら嬉しい」というメッセージが伝えられた。 〇スタインウェイピアノ演奏体験 8 月 4 日（水） 特別講座にご参加いただいた方を対象に、1 組あたり 30 分間のスタインウェイピアノ演奏体験を実施した。9 名の方が参加し、貴重なスタインウェイピアノの音色を体験できる時間となった。
感想	【入場者より】 ●特別講座 〇ピアノを 10 年以上習っているのに、仕組みを全く知らなかったので、知ることができて良かったし、とても面白かった。 〇音の出る仕組みを子供でも分かるように教えて頂きピアノにもっと興味がわいた。スタインウェイの特徴は少し難しかったが、他のピアノとの違いや工夫がよく分かった。 ●公開レッスン・発表公演 〇夏休みの企画として良かった。素晴らしいピアノと素晴らしいホールでの演奏、響き、技術的な指導だけでなく、ホールの特徴や伝え方、伝わり方のアドバイス、普段の練習では気づかないことを教えて頂いて素晴らしかった。 〇公開レッスンというのを初めて見せてもらい、ホールでの演奏の際、音の響きを聴きとる指導が興味深かった。スタインウェイの構造と演奏の工夫、今後の鑑賞の参考にしたいと思った。 〇中川先生の指導を地方の生徒が受けられることは勉強になった。この様な企画を安いレッスン料で実施していただきありがたい。受ける生徒の質の向上を望む。 〇今回のような公開レッスンとレッスンを踏まえての発表会という企画は、レッスンを受けただけにとどまらず、成果を発表できる機会を頂けるという素晴らしい企画だと思う。 【受講生・参加者より】 ●公開レッスン 〇曲を書いた時の作者のことやその時代のことを知ることで、どのような気持ちや雰囲気で演奏すると良いか考えることができた。 〇（保護者から）子どもからピアノ教室の時間を増やしたい、上手になりたいなど、上達への意欲の言葉が出てきて親としても嬉しく思っている。 〇技術的なことを中心にレッスンを受けるのかと思っていたが、ピアノやホールの魅力

	を引き出す方法なども勉強することができた。 ○自分が習っているピアノの先生から、「ピアノを弾く際はオーケストラを想像すること」とよく聞かされていたが、中川先生のレッスンを受けて本当の意味を理解することができた。 ○1000 人を超える観客を収容できるホールだと、普段の家での練習とコンサートの音の響かせ方を使い分ける必要があると改めて実感した。受講前よりピアノやホールを見ることができるようになったので、確実に自分のものにするため日々の練習で耳を澄ましてピアノの音を聴きたいと思った。 ●スタインウェイピアノ演奏体験 ○一つひとつの音がとてもきれいだった。音の響きを体で感じられた。ピアノがもっと好きになった。 ○先日の講話を聞いた後のピアノ演奏だったため、スタインウェイピアノの素晴らしさがよく理解できたこともあり、音の響き等が伝わった。とても良い体験ができ貴重な思い出になった。 ○貴重な体験になった。ぜひまた参加したい。普段弾いているピアノとは違うので、タッチや響きなど良い練習になった。
成果と課題	○例年は無料で希望ホールの大ホールでスタインウェイピアノを演奏できるという内容だったため、ピアノの演奏を目的としない合唱など、普段から利用している利用者が無料でホールを利用することだけを目的としての参加や、期間中ピアノ調律がない状態で次々と弾き続けるという状況で、スタインウェイの良さを実感できる内容とは程遠い事業となっていた。市民の財産でもある希望ホールのスタインウェイピアノについて、その歴史、構造から学び、一流のアーティストからのレッスンを受け、響きのいいホールで発表会を行うという内容に見直し。またコロナ対策の観点からも人数を制限する必要があったため、演奏体験は特別講座に参加した方のみが参加できるようにした。これにより、特別講座や演奏体験を通して本当にピアノについて学びたい方の参加が増え、学びの質も大きく向上したと考えられる。一方で、参加者の間口を狭めることのないように、特別講座や発表公演は誰でも参加・鑑賞できるようにし、ピアノ経験がない市民にも希望ホールのスタインウェイピアノの魅力を知ってもらう内容とすることができた。 ○特別講座では、ピアノ未経験者や子どもでも分かりやすいように、カメラやオルゴール、ピンポン玉を取り入れ五感に訴える手法を用いて理解しやすくするなど、ピアノについて気軽に学ぶきっかけを作ることができた。 ○数多くのホールで様々なピアノで演奏してきたピアニストだからわかる、他社のピアノとは異なるスタインウェイピアノの作りの素晴らしさや、ピアノが長い歴史の中でどのように変化してきた楽器だったか、また、多くの人々に愛されてきた理由など、分かりやすい解説によって学ぶことができる場となった。事業を通して、スタインウェ

	イピアノとその音色を客席内に響き渡らせることができる環境が整ったホールが、身近にあることの価値を認識することにつながった。そのようなホールであることを中川氏が説明することで、ホールで演奏することの意義や希望ホールへの誇りの醸成につながる機会を提供することができた。 ○公開レッスンでは、受講生の演奏スキルの向上のほか、その様子を公開することで、見学している方も一緒に、ピアニストの中川氏の考えや音の響かせ方、演奏の聴き方などを受講生の演奏を題材に学んだり感じたりすることができた。今後のリサイタル等での鑑賞方法の参考にもなり、またアーティストと直接交流を持ったことで、本事業に参加した受講生や観客が、中川氏の公演は勿論、他の演奏家の公演にも足を運ぶ方が多くみられ、事業が「点」で終わらずにつなげていくことができた。 ○公開レッスンは、中川氏からマンツーマンでの指導を受ける貴重な機会であり、受講生の今後の練習への向上心やスキルアップの一助となることができた。 ○レッスンの受講生や見学しているピアノ教室の先生等が各教室にこの体験を持ち帰り、学びの共有につながることで市内のピアノ教室での意識も高まり、音楽の普及・発展に寄与することができた。 ○調律師が出演し、中川氏の説明とその仕事の一端をみせることで、調律師という仕事や存在を知ってもらうきっかけとすることができた。 ○開催日について、日曜日に特別講座・公開レッスン、火曜日に発表公演という日程だったが、発表公演は平日開催だったこともあり夏休み期間ではあったが入場者数が少なかった。せっかくの成果発表の場であるため、こちらも休日に実施するなど、参加しやすい日程を検討する必要がある。今年度までは事業全体のスケジュールの組み方に課題があったが、来年度以降はこれまでよりも計画的に事業を運営していく。 ○公開レッスンの受講生募集の際、インターネットで連絡先が確認できるピアノ教室宛てに募集要項を送付したが、掲載されていない教室には案内を送付できなかった。どういう対象にどういう成果を目指すのかを、募集スケジューリングと併せて情報発信の観点からも意識して行く必要がある。

アーティスト・イン・レジデンス事業（ダンス） 中村蓉　特別支援学校ワークショップ、公募ワークショップ、ダンス公演「ジゼル」報告書	
基本的施策	2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 3　学校教育における文化芸術活動の充実 4　将来の文化芸術の担い手育成 5　文化芸術活動を支える人材の育成 10　文化芸術による社会包摂 11　文化芸術に関する施策と生涯学習との連携及び強化 12　多様な分野との連携及びネットワークづくり 15　文化施設の活用
目　　的	身体の存在そのものがアート表現になり得るダンスの魅力を通じて、心と体を刺激し、個々の表現能力や創造力を高めるとともに、自身や他者の魅力（自己肯定感と他者への寛容性を育む）、身体の可能性と自由性の気づきを得るための動機付けを図る。これまでコンテンポラリーダンスの公演実績の少ない本市で、一流のダンス公演（舞台芸術）を鑑賞する場を創出し市民に対してダンスの魅力を改めて発信すること、継続してダンス事業に関心を持ってもらうことを目的とする。 本格的なダンス事業実績のない希望ホールにおいて、ダンス事業に関する担当職員・当ホールテクニカルスタッフの育成の足掛かりとすることを目指す。
日　　時	○特別支援学校ワークショップ 令和３年９月24日（金）9：00～14：00 ○公募ワークショップ　令和４年２月３日（木）開場 18：00 開始 18：30 ○公演　令和４年２月６日（日）開場 13：30 開演 14：00
対　　象	○特別支援学校ワークショップ 児童生徒　教職員 ○公募ワークショップ　中学生以上（ダンス経験不問）定員／２０名 ○公演　小学生以上
会　　場	○酒田特別支援学校 ○希望ホール大ホール
事業内容	○ワークショップ　○公演
出 演 者	○特別支援学校ワークショップ　講師／中村蓉　アシスタントダンサー／田花遥 ○公募ワークショップ　講師／中村蓉　アシスタントダンサー／仙優奈、田花遥 ○公演　振付・構成・出演／中村蓉 出演／仙優奈、田花遥　映像／中瀬俊介（Ｂａｏｂａｂ）

<table>
<tr><td rowspan="4">事業関係者数</td><td>参加者数</td><td>〇特別支援学校ワークショップ 児童生徒５９名　教職員３０名
〇ワークショップ　参加者１５名（申込者１９名）
〇公演　観客数６０名（完売/コロナ対策により、50%販売：定員５０名、5席追加、５名立ち見）</td></tr>
<tr><td>出演者</td><td>〇特別支援ワークショップ　２名
〇公募ワークショップ　３名
〇公演　３名</td></tr>
<tr><td>スタッフ</td><td>〇特別支援ワークショップ　１名
〇公演　６名
〇公募ワークショップ　４名</td></tr>
<tr><td>総数</td><td>184 名</td></tr>
<tr><td>事業詳細</td><td colspan="2">一般財団法人地域創造の助成事業、現代ダンス活性化事業の C プログラム（公演＋公募型ワークショップ、以下「C プロ」）として実施。本市では、同事業の B プログラム（市民参加型公演、以下「B プロ」）を平成２９年度、A プログラム（アウトリーチ＋公募型ワークショップ、以下「A プロ」）を平成３０年度に行っている。関連事業として、酒田特別支援学校においてダンスワークショップを実施した。

◎酒田特別支援学校ワークショップ
１コマ目（聴覚小学部４名・聴覚中学部１名）
生徒は補聴器を使用することで、ある程度の音声は聞こえるため、講師 2 名は手話通訳無しで、マウスシールドを使用し、口話、声、ジェスチャーでコミュニケーションを取ることができた。最初の表現は、プロジェクターに映した画像を見て、その物になりきり形を体で表すというもの。丸いリンゴ、かじられたリンゴ、剥かれたバナナなどの画像が映し出されると、すぐに生徒たちがそれぞれ体全体を使って、思い思いに自由に表現していた。また、講師の表現方法に触発され、生徒たちの表現もどんどんダイナミックになっていった。

</td></tr>
</table>

２コマ目（知的障害中等部）
身体障害との重複で車いすの生徒が１名参加。最初は画像・写真を見て、それをイメージした音楽と共に体で表現するというもの。講師の多彩でダイナミックな表現に刺激を受けた生徒たちは、早いテンポで変わる画像・写真に合わせて自由かつ大胆に体全体で表現するとともに、お互いを見合って誰の模写が一番良いかなど話し合い、褒め合っていた。車いすの生徒も、教職員の補助を受けながら上半身を動かし積極的に表現していた。最後は講師の躍動感あふれる振付を生徒・教職員が覚え、全員でダンスを踊り終了。その後も、生徒が講師に積極的にダンスでコミュニケーションをとる姿が見られた。

３コマ目（知的障害高等部）
養護施設等でのワークショップ経験を有する、市民アシスタントダンサー（荘銀タクト鶴岡（以下「タクト」）を中心に活動中）が講師として参加。講師３名での実施となった。初めは動きが固かった生徒も、講師それぞれから明るく声をかけられると徐々に動き始め、あとは反応良く自由に動けるようになった。高等部ということで生徒数が多く、１・２コマ目と比較すると生徒の障がいの程度の差が大きく、また障がいの種類も幅広かったが、講師が３名になったことで、それぞれの生徒の個性に合わせた丁寧できめ細やかな対応ができたと感じられた。最後に全員で踊ったダンスでは、生徒の表情に自信と喜びがあふれ、体育館全体がダンスの魅力とエネルギーで満たされた。

◎公募ワークショップ
新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会場の換気、消毒を徹底し、お互いの距離を取りながらマスク着用で実施。参加者の年齢層は１０代から６０代と幅広く、またダンス歴が長い人がいる一方、この企画に魅かれて初めてダンスをする人も多かった。講師は最初に参加者全員に話しかけながら、ダンス経験の有無・参加動機などを共有したうえで、全員が無理なく取り組めるワークショップ内容を組み立て実施した。
　お互いのポーズを真似しながら伝えていく「伝言ゲーム」や、複雑に積み上げられた数脚のスタッキングチェアを体で表すなど、身体全体を使って自由に表現することの楽しさを体験する内容となった。

◎公演

（一財）地域創造の助成事業を活用、要項に則り、中村氏のレパートリー作品で、古典バレエの代表作『ジゼル』を上演。氏は２０１９年より『ジゼル』の制作に取り組み、２０２０年４月に初演を予定していたが緊急事態宣言により中止。かわって『ジゼル特別３０分版』を動画配信、２０２１年６月に神奈川県立青少年センターでソロダンス公演『ジゼル』を上演しており、ダンス界では注目を集めた作品である。

今回の希望ホール公演では、中村氏他スタッフは２月３日から酒田に入り、希望ホールのテクニカルスタッフ、担当者と共に制作作業を行った。同ホールの特徴を生かし、通常の客席を作品の演出として使用し、舞台上に仮設の客席を設置した特設ステージでの上演となった。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、座席数を半数（100 席→50 席）に減らしての開催となったが、前売りチケットは完売となり、当日は立ち見客も出た。

４日間の作品制作の過程で、中村氏、中瀬氏（映像担当テクニカルスタッフ）、希望ホールスタッフと幾度となく打合せ・試行を繰り返し、妥協を許さず最後まで作品創りを追求した結果、『ジセル』に、中村氏の大胆で独創的な演出が活き、生と死とその狭間の物語が、希望ホール大ホール全体を使って壮大に表現された。大ホールの客席をステージと一部として使用した舞台の迫力と美しさは、舞台上の客席から見る観客を圧倒した。繊細さと力強さが混在する渾身の身体表現を繰り広げる中村氏と、その世界に魅了された観客がひとつとなった。

感想 （アンケートより）	**◎特別支援学校ワークショップ（教職員より聞き取り）** ○聴覚障害児は、視覚からの情報処理能力が高く、講師の動きや画像の特徴を素早く的確に捉えていると感じた。 ○最初は少し遠慮する姿が見られたが、講師からの声掛けにより、すぐに自由に体全体で表現できるようになった。生徒の特徴・反応を見ながら講師が対応してくれたので、生徒が不安なく自然にダンスに取り組むことができた。 ○聴覚・知的に障がいがあるが、講師とのコミュニケーションは十分にとれていたと思う。 ○普段の生活・授業では見ることがない、生徒の一面をダンスによって初めて知ることができた。 ○生徒だけでなく、教職員も大変楽しかった。ダンスの持つ力に感動した。 ○本物だからこそ、子どもたちの表情の豊かさや変化を引き出すことができるのだ思う。これからも続けてほしい。 **◎公募ワークショップ** ○ダンスは初めてだが、とても楽しかった。思い切って参加してみて本当に良かった。 ○これまでコンテンポラリーダンスに興味はあったが、どこで体験できるのか分からなかった。今回の企画を知ることができて良かった。 ○コロナ禍でダンスをする機会、誰かと踊る機会が極端に減った。今日は大ホールの開放的な空間で皆さんと踊ることができて嬉しかった。 ○新しい表現の形を知り、とても新鮮な体験ができた。 **◎公演** ○演者の表情や筋肉の動きが間近で見れて迫力を感じた。 ○ステージの使い方に驚いた。アーティストの表現をとても近い距離で体感でき、幸せな時間だった。 ○演者の『生』の躍動が全身で表現されていた。 ○ダンス公演を見るのは初めてだが、演者の迫力に圧倒された。公演とアフタートークのギャップに少し驚いた。 ○コロナ禍で、生で公演を見ることができ幸せに思う。

成果と課題	○特別支援学校ワークショップについて、教職員がダンスの可能性に大きな興味・関心を持ってくれた。今度、教職員向けのインリーチ等を検討し、身体表現を通じた子どもたちとのコミュニケーションの充実を図るためのきっかけ作りとなるよう、連携を図っていきたい。 ○通常の児童・生徒向けワークショップは１コマ９０分で実施し、前半はダンスを通じてコミュニケーションを図る（アイスブレイク）、後半は前半で体験した身体表現を応用させ、簡単な発表を行い「作品」を見せあうことで、ダンス（アート）の魅力、自分の身体の可能性、他者や自身を認める多様性を体感する、というプログラムであるが、今回は対象が障がい児であることを理由に学校側の希望で、1 コマ 45 分での実施とした。実際にワークショップに参加する姿を見ると、障がいが聴覚のみの児童については 45 分はやや物足らない感があり、来年度のワークショップ実施に向けて、対象の児童・生徒にとっての適切な時間設定について学校と相談・検討することとした。 ○公演、公募ワークショップ共に本市では数年ぶりの本格的なダンス事業であり、市民に対してダンスの魅力、舞台芸術の素晴らしさを改めて発信することができた。今後は、より多くの市民からダンスに関心を持ってもらい、ダンスの多様性・自由性を知ってもらえるよう、継続してダンス事業を行っていく必要がある。 ○公募ワークショップについては、広報開始から当日まで、継続的に問い合わせ・申し込みがあり、当日は市外のみならず県外からの参加者もいた。本事業に参加したきっかけを聞いたところ、ホームページの情報やチラシ、ポスターに魅かれたという声が多く聞かれ、今回力を入れた視覚的情報発信が、集客に大きく繋がったことが分かった。また参加者の半数がダンス初心者であったことから、ダンスにふれる機会を渇望する市民が一定数いることが判明した。 ○公演については、市内で新型コロナウイルス感染者が増加したことも影響し、事前の券売状況は芳しくなかったが、当日は多くのお客様から来場いただいた。公演後に、『ジゼル』への感動、鑑賞できた喜びの声が数多く寄せられ、公共ホールにおいて上質なダンス鑑賞事業を実施する必要性と意義を強く感じた。 ○市担当者・ホールスタッフにとって、アーティストと一から作品を創りあげるという本事業は、大変貴重で有意義なものとなった。ホールが自主事業として舞台作品制作を行う意義、ホールが地域に対して担う役割について、事業を通して改めて知ることができた。また、ホールの設備的な問題点（照明・演出機材の不足また老朽化、空調の不具合等）や市担当職員・ホールスタッフの経験値の低さ等、様々な課題が明らかになった。今後はこれら課題を整理することで、より上質な舞台芸術の提供を目指す。 ○舞台上舞台という通常とは違ったホールの使い方による演出を観客に見せることで、希望ホールの新しい魅力や活用方法、舞台芸術の多様性を提供することができた。 ○隣市のタクトが１週間違いでＣプロ実施であったこと、また前年度タクトで実施したＢプロの出演アーティストが中村氏であったことから、市域を超えた庄内地域全体へのダンスの魅力発信、その普及を目指し、両館で広報・人材交流・事業運営等で連携

	（連携名『Dance Connect Shonai』）を図ることとした。タクトが令和３年度３月に実施したＢプロのWS、令和３年度６月に実施したＣプロのインリーチに、当ホールから職員が参加。両館の交流を図るとともに、ダンス事業経験の乏しい当ホール職員にとっては、事業の準備や流れなどを学ぶことができる貴重な機会となった。広報では、両館公演情報をひとつにした合同チラシを作成。下見日程の際にチラシ用の写真をそれぞれ撮影し、『Dance Connect Shonai』と各レパートリー作品公演の魅力を発信できるチラシになるよう両館で協議を繰り返した。デザインについては地域のデザイナーに一から当たり、信頼できるデザイナーにたどり着くことができ、印象深いチラシに仕上げることができた。また制作費の折半など、経費の面でも戦略的に実施できた。チラシ・ポスターの配布・設置日、市広報・ホールHPへの掲載時期、プレスリリース日時等、両館で足並みを揃え一体となった広報展開を心掛けた。公演準備・運営の際は両ホールで職員を派遣し合う予定であったが、山形県内で新型コロナウイルス感染者の急増により、鶴岡公演が中止となったため、残念ながら実現には至らなかった。 それら様々な試みを行った結果、集客に大きく繋がったものと考えている。またこの連携により、地域のクリエーター（デザイナー）の発掘、前述の市民アシスタントダンサーの発掘と事業参加（育成）につながり、以後当館事業のチラシ制作やダンスワークショップへの協力など、大きく貢献していただいている。またタクトとは、ダンス事業のみならず、音楽事業や研修事業でも連携を図ることにつながった。令和４年度以降もさらに連携を深め、ダンスのみならず様々な芸術分野において市域を超えた庄内地域全体の活性化、交流人口の増加を目指す。

<table>
<tr><td colspan="3">アートスタート事業
（ペタペタ！ワクワク！ミライのさかたをつくっちゃおう！）</td></tr>
<tr><td colspan="2">基本的施策</td><td>2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備
4　将来の文化芸術の担い手の育成
5　文化芸術活動を支える人材の育成
6　市民との協働・共創による事業展開
10　文化芸術による社会包摂
15　文化施設の活用</td></tr>
<tr><td colspan="2">目　　的</td><td>幼いころからアートとふれ合う機会を提供することで、アートを身近に感じ、子どもたちの想像力を育むことを目的とする。</td></tr>
<tr><td colspan="2">日　　時</td><td>7 月 24 日(土)午前 10 時～11 時
10 月 9 日(土)午前 10 時～11 時</td></tr>
<tr><td colspan="2">対　　象</td><td>３～６歳の子供とその保護者</td></tr>
<tr><td colspan="2">会　　場</td><td>希望ホール小ホール</td></tr>
<tr><td colspan="2">事業内容</td><td>大きな紙いっぱいに「未来の酒田」の地図を描くワークショップ</td></tr>
<tr><td colspan="2">講　　師</td><td>rikko（イラストレーター）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">事業関係者数</td><td>参加者数</td><td>1 回目　子ども　13 名、保護者　12 名　（12 組の親子）
2 回目　子ども　8 名、保護者　7 名　（7 組の親子）</td></tr>
<tr><td>講師</td><td>1 名</td></tr>
<tr><td>スタッフ</td><td>3 名</td></tr>
<tr><td>総数</td><td>41 名</td></tr>
</table>

事業詳細	酒田市出身で児童用テキストの挿絵などを中心に活躍されている、イラストレーターのrikko 氏を講師に迎え、工作ワークショップ「ペタペタ！ワクワク！ミライのさかたをつくっちゃおう！」を実施した。 希望ホール小ホールにて、3～6 歳の子どもとその保護者を対象に、大きな紙いっぱいに色々な道具を使って未来の酒田の地図を描いた。 ○1 回目の様子（7 月 24 日実施） この日は、12 組 25 名の親子が参加。まず、2 つの班に分かれ、床に敷かれた大きな紙に、身近にある歯ブラシやスポンジなどを使って、自由に色を塗ったり絵を描いたりして、地図の半分ずつを各班で作成。子どもも大人も、絵具やクレヨン、スポンジなどを使って、色や形のでかたを楽しんだ。その後、事前に貼られたテープを剥がして、カラフルな絵の中に白い道を作った。 続けて、道ができた地図の中に、事前に自宅で準備してきた、酒田にあったらいいなと思うお店や野球場、自分が欲しい車、家族などの絵を自由に貼っていく。地図のどこに貼ろうか考えたり、これはどんなお店なのか話したりしながら貼った。 ２つの班の作品をつなげると、１枚の大きな酒田の地図が完成。 全員で創った地図やそれぞれが描いてきた絵を見ながら、未来の酒田の街を散策した。

	○2 回目の様子（10 月 9 日実施） 2 回目は、7 組 15 名の親子が参加。1 回目同様に歯ブラシ、ほうき、スポンジなどを準備したが、手足に絵具を塗ってスタンプにしてみる、足を擦りながら滑るように歩いてみるなど、体を使って色を塗る子どもが続出。時おり笑い声をあげながら、色々な感覚を使って表現することを思いきり楽しんだ。1 回目とはまた違い、地図に残った数々の小さな足跡から自由にのびのびと楽しむ様子がうかがえる素晴らしい作品となった。 ○作品の展示 完成した 2 つの作品は、希望ホールロビーとアートインフォメーションコーナー（市役所正面駐車場の駐輪所隣）にて 1 か月程度展示し希望ホールの来館者や市役所への来庁者などの目にふれる機会を設けた。 ○新型コロナウイルス感染防止 当日の検温・消毒に加え、事前にワークショップ当日の体調や直前に感染者と接触していないことを確認するチェックリストを配布し、当日チェックリストに問題のない方のみ参加できることとした。また、全員が一か所に集まらないよう、2 班に分けることで互いの距離を取りやすいように工夫した。
感想	○希望ホールは初めて利用したが、綺麗で広い会場なので子どもとも参加しやすかった。 ○ 親子一緒に絵の具であのくらい大胆に楽しむというのは家ではなかなか難しいので、良い思い出になった。参加人数もちょうどよく、2 グループに分けていたので、遠慮しがちな性格の娘ものびのびと楽しめた。 ○自分の作品も使いながら、最終的には 1 枚の紙になることで、子どもながらに一緒にものをつくるという体験ができることが良かった。 ○親も一緒に楽しむというコンセプトで最初に写真禁止と言われ、日頃一緒に遊べていなかったのかもしれないと反省した。ハッとさせられたが、そのおかげで楽しめた。 ○子連れなので出かける準備や昼食の時間を考慮してもちょうど良い時間帯だった。

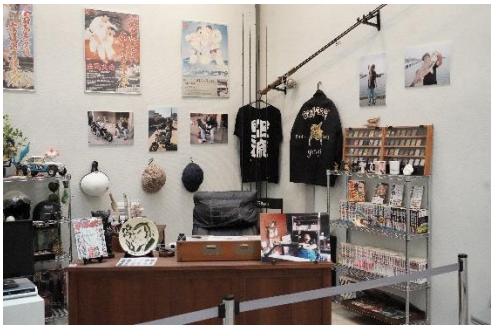
成果と課題	○希望ホールを利用したことがない市民が来館するきっかけになった。 ○自宅では難しい、多様な道具や手足、絵具やクレヨンを使って大きな作品を自由に制作するワークショップにすることで、五感を使って大胆に表現する楽しさを体験できる場にできた。 ○本事業は、プライバシーの観点は勿論、子どもの活動の様子を写真に収めることに集中してしまう保護者もいることから、保護者も一緒になってワークショップに参加し、親子のふれあいの時間としてもらうことのほかに、いつもとは違った子どもの側面や可能性に気付くきっかけとするために活動中の写真撮影を禁止した。親子で感覚を共有しながら、アートや子供の感性に向き合う・気づくきっかけとなった。 ○全員で 1 つの作品を作ることで達成感を共有したり、事前に自分で描いてきた絵を互いに見せ合ったりすることで自分とは違う感性にふれ、多様性を感じる機会となった。 ○最後に地図の上を散策することで、全員で完成作品を共有できたが、一方で事前に描いてきた自分の絵を踏まれて悲しむ参加者がいた。今後のワークショップでは作品の扱い方で不快に感じることのないような配慮が必要。 ○今回は 2 回とも同内容の企画となったが、また参加したいと思ってもらえるよう、リピーターにつながる工夫や仕掛けの検討が必要。 ○9 月に開催した、アートマルシェのコロコロ迷路作りのワークショップで 2 回目の本事業を紹介したところ、「知らなかった」「参加したい」との声が多かった。事業に関心がある層への情報発信の工夫が課題としてあげられる。

アートスタート事業 （おんがくとえほんのおへや）		
基本的施策		2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 4　将来の文化芸術の担い手の育成 5　文化芸術活動を支える人材の育成 6　市民との協働・共創による事業展開 10　文化芸術による社会包摂 15　文化施設の活用
目　　的		アートにふれる機会を提供し、アートの面白さを体験することでアートを身近に感じ、子どもたちの想像力を育むことを目的とする。
日　　時		6 月 23 日(水)、6 月 30 日(水)　午前 10 時～11 時
対　　象		0 歳～２歳児とその保護者
会　　場		希望ホール小ホール
事業内容		リトミックと絵本の読み聞かせを中心とする。 音楽にのって遊び活動する中で、音楽の楽しさ、心地よさを味わう。 絵本を通して言葉や絵の楽しさを味わい、絵本に興味や親しみの気持ちをもってもらう。
講　　師		加藤 真知子氏（元県家庭教育アドバイザー） 加藤 千鶴　氏（リトミックスタジオ Passage 主宰）
事業関係者数	参加者数	41 名（子ども 21 名、保護者 20 名） 6 月 23 日(水)11 組（子ども 11 名、保護者 10 名）、 30 日(水)10 組（子ども 10 名、保護者 10 名）、
	講　師	2 名
	スタッフ	3 名
	総　数	46 名

事業詳細	幼い頃からアートにふれる機会を提供し、アートの面白さを体験することでアートを身近に感じ、子どもたちの想像力を育むことを目的に実施しているアートスタート事業。 真知子氏と千鶴氏、そして一緒に参加するクマのぬいぐるみの紹介に続いて、音楽に合わせて体を動かすふれあい遊びが始まった。まだ立ち上がれない子どもは保護者の膝の上に乗って遊んだり、立ち上がれる子どもは保護者と手を繋いで歩いてみたりと、音楽に合わせて楽しそうに体を動かしていた。 続いては、千鶴氏によるリトミック。リトミックとは、音楽に合わせた体遊びのことで、千鶴氏のピアノに合わせて体を動かしたり、口ずさんだりしながら楽しむ参加者たち。ウサギのパペットを手にした千鶴氏が、優しく語りかけながら「誰が来たのかな～？」と問いかけると、「ウサギさん！」と子どもたちから大きな声が挙がった。 梅雨の時期にちなんだ「ぴっちゃんぽっちゃん」のコーナーでは、小さなスカーフをもって遊んだり、小さなペットボトルでできた手作りマラカスを振って音を出したり、雨のような音が出る「レインスティック」という楽器の音を楽しんだりした。 「レインスティック」で雨が降った後は、大きな虹色のスカーフを職員が広げて参加者の頭上を通り抜け、子どもたちは興味津々でスカーフに手を伸ばしたり、飛び跳ねたりしていた。まだ数か月の子どもも、保護者が振るマラカスや小さなスカーフが揺らめく様子をじっと見つめていた。 続いては、真知子氏による絵本の読み聞かせ。「ぴっちゃんぽっちゃん」という絵本は、子猫のプチュと一緒に雨の日をお散歩していく内容で、リトミックに続いて絵本で描かれる雨の様子を、参加者は親子で楽しみながら聞いていた。 「はらぺこあおむし」は大きな絵本を使った読み聞かせで、絵本にはあおむしが食べた後の穴が開いており、真知子氏が手にしたあおむしのぬいぐるみが、その穴をくぐって

	次のページに続いていく様子をじっと見つめていた。 最後はこの事業ですっかりおなじみとなった童謡『にじ』を皆で歌って事業を締めくくった。 参加者は、親子で一緒になって音楽や体の動き、読み聞かせを楽しんでいた。講師からは自宅でもできる音遊びや読み聞かせの方法についてアドバイスがあった。
感想	○一時間があっという間に感じる内容で、長すぎず短すぎず、内容も知育に通じるもので勉強になった。家でもやってみようと思う。 ○子どもの笑顔が見られたのがよかった。 ○申し込みが直接ホールで行うのではなく、電話やＷＥＢで行えたら参加しやすい。 ○音楽も絵本も子供が楽しそうで、とってもご機嫌だった。押し麦のマラカス、大きいはらぺこあおむし、にじ色のスカーフが特に楽しそうだった！ ○他のお友達と触れあう機会がないためリトミック、歌などを皆と楽しくできて嬉しかった。 ○コロナで育休中一緒に外出できる機会がなかなか作れなかったので大満足。
成果と課題	○昨年度は対象年齢を単に「未就学児」としたことで年齢や成長の度合いにばらつきが出てしまった反省を踏まえ、対象年齢を０～2 歳児と絞ったことでより効率的に事業を実施することができた。 ○コロナ対策として、検温・手指消毒、参加者同士の十分な距離の確保、使用した物品の消毒を徹底した。 ○予約方法については、希望ホールの窓口のみでの申し込みとしていたが、電話やＷＥＢで行ってほしいという声があったため、来年度以降より参加しやすい申し込み方法を検討する必要がある。 ○プライバシーの観点は勿論、子どもの活動の様子を写真に収めることに集中してしまう保護者もいることから、保護者も一緒になってワークショップに参加し、親子のふれあいの時間としてもらうことのほかに、いつもとは違った子どもの側面や可能性に気付くきっかけとするために活動中の写真撮影を禁止した。親子で感覚を共有しながら、アートや子供の感性に向き合う・気づくきっかけとなった。 ○希望ホールに足を運ぶ機会の少ない若い世代の親に、ホールを身近に感じてもらうきっかけとなった。

SAKATA アートマルシェ 2021 報告書	
基本的施策	2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 6　市民との協働・共創による事業展開 10　文化芸術による社会包摂 12　多様な分野との連携及びネットワークづくり 13　文化財等の地域資源の活用 15　文化施設の活用
目　　的	郷土が生んだアート、長い歴史の中で受け継がれてきた伝統文化に焦点をあて郷土愛の醸成、伝統芸能等の保存・継承を目的とする。 また、地域で活動する演奏団体によるコンサートや、参加型の多彩なイベントを開催することで、幅広い市民が気軽に集い、文化芸術にふれる機会の創出、文化施設の魅力を再認識してもらうきっかけづくりにつなげる。 「社会包摂と育成」の方針に基づき、文化活動をしている市民、まちづくりに携わる市民・学生、障がい者施設の職員の皆様等と共に考え協働しながら、共生社会を目指す。
日　　時	9 月 14 日~26 日（詳細は、以下「事業詳細」参照）
会　　場	酒田市美術館、酒田市公益研修センター、酒田市出羽遊心館
事業内容	○佐藤タカヒロ漫画原画展 ○トークイベント「漫画家 佐藤タカヒロを語る」 ○いいいろいろいろ展 ○ワークショップ　【かわいくておいしい！アイシングクッキーを作ってみよう！】 ○ワークショップ【しかけがいっぱい！コロコロ迷路をつくろう！】 ○酒田吹奏楽団ミニコンサート ○酒田舞娘による演舞 ○黒森歌舞伎上演
来場者総数	2,737 名

事業内容	2019 年の開催から 4 回目となる今回は、企画展として、酒田が誇る漫画家 佐藤タカヒロ氏の漫画原画展と、昨年度も好評の、障がい者の方々と一緒に作りあげる作品展「いいいろいろいろ」展を開催。さらに、長い歴史の中で受け継がれてきた黒森歌舞伎、酒田舞娘の演舞や、地域で活躍する酒田吹奏楽団によるミニコンサート、家族で参加できるワークショップなど、市民に気軽にアートにふれて楽しんでいただける様々なイベントを実施した。 〇佐藤タカヒロ漫画原画展　酒田市美術館市民ギャラリー 9 月 14 日（火）～26 日（日）入場者 1,640 名 本展は、酒田出身の漫画家　故佐藤タカヒロ氏(2018 年没)の画業を振り返り、全国の人々に愛された漫画家の生涯と作品を紹介するもの。佐藤氏が遺した多くの原画作品から厳選した約 90 点を展示。通常の絵画作品展示では、床高 145 ㎝に作品中央が来るように設置するが、今回はより多くの作品を展示するために、145 ㎝を中心にして上下での 2 段掛けで展示を行った。また、ギャラリーの右奥には、佐藤氏が実際に制作に使用した大型の机、大きな背凭れの革張りの椅子を中心に、絵具、パステル、色鉛筆といった様々な画材を展示することで、生前の仕事部屋を忠実に再現した。  〇トークイベント「漫画家 佐藤タカヒロを語る」　酒田市公益研修センター大ホール 9 月 9 日（日）来場者 120 名 出演：株式会社秋田書店 週刊少年チャンピオン編集部　松岡秀和氏 　　さかた文化財団　学芸員　井上瑠奈氏 故佐藤タカヒロ氏の担当編集者 株式会社秋田書店の松岡氏と、佐藤タカヒロ漫画原画展の企画・展示を担当した、酒田市美術館学芸員井上氏とのトークイベント。新型コロナ

ウイルス感染拡大の状況を鑑み、東京の秋田書店と、酒田市公益研修センターを zoom で繋ぎ、松岡氏はリモートでの出演とした。
松岡氏からは、佐藤氏の作品制作の様子、佐藤氏との思い出について紹介。会場に来場していた佐藤氏のアシスタント 2 名も参加し、当時の佐藤氏とのやり取りや、特徴的な原画についてその背景にある制作の秘話など、様々な興味深い話が繰り広げられた。
学芸員の井上氏は、原画から分かる佐藤氏の情熱、作品と向き合う真摯な姿勢について専門的な観点から解説。また、デジタル化が進む中、「原画」が持つ価値とその重要性・貴重性について説明した。
後半の質問コーナーでは、来場者から作品について多くの質問が寄せられた。

〇いいいろいろいろ展　酒田市出羽遊心館
9 月 18 日（土）～26 日（日）来館者 652 名
酒田市在住の障がいのある方々が制作した、絵画、書道、造形物など 126 点のアート作品、酒田市出身の作家 佐藤真生氏と障がいのある方々との共同作品の展示会。
今回で 4 回目となる展示会には、17 の障がい者団体が参加。やまがたアートサポートセンターら・ら・ら、酒田市社会福祉協議会、佐藤真生氏、アートディレクターの中島友彦氏と共に、作品を通して作者の人柄や個性、魅力を発信できるよう、創意工夫を繰り返し展示会に臨んだ。
出羽遊心館の各展示室は、茶室や廊下、床の間など、背景と融和させたり違いを際立たせたりしながら広がりのあるアート空間となり、色鮮やかな絵画、鉛筆のみで描かれた緻密なデッサン、迫力のある書や、神秘的な造営物など、多種多様なアートが展示。また、伝統の手すき和紙を材料に用い、それぞれが制作したパーツを組み合わせて制作された佐藤真生氏と障がいのある方々との共同作品「夢傘福」も展示された。

	○ワークショップ　【かわいくておいしい！アイシングクッキーを作ってみよう！】 公益研修センター　中研修室 1 9 月 18 日（土）1 回目 10：00～　2 回目 14：00～　参加者計 60 名 日本サロネーゼ協会アイシングクッキー認定講師の佐藤あみ氏による、アイシングクッキー作りのワークショップ。地元産庄内米の米粉を使ったクッキーに、砂糖と卵白でできた柔らかな色合いのアイシングを使ってそれぞれ模様を描き、作品を完成させた。 ○ワークショップ【しかけがいっぱい！コロコロ迷路をつくろう！】 公益研修センター　中研修室 2 9 月 18 日（土）1 回目 10：00～　2 回目 14：00～　参加者計 43 名 東北芸術工科大学准教授松村泰三氏を講師に迎え、開催した工作ワークショップ。箱の中に段ボールやモール、発砲スチロールなどを使って様々な仕掛けを作り、その中でビー玉を転がして遊ぶ「コロコロ迷路」を作成。 ○酒田吹奏楽団ミニコンサート　公益研修センター　ホール 9 月 20 日（月・祝）10：30～　来場者 150 名 今年度、第 64 回東北吹奏楽コンクール職場・一般の部において金賞を受賞し、３６年ぶりに東北代表として全国大会出場団体に選ばれた酒田吹奏楽団によるコンサート。新型コロナウイルス感染拡大の状況から、当初予定していた演奏内容から変更し、サックス、金管それぞれによるアンサンブルでの演奏となった。

〇酒田舞娘による演舞　酒田市出羽遊心館
9 月 20 日（月・祝）11：30～　来場者 37 名
酒田市のＰＲ活動や、相馬樓を中心としたお座敷などで日々活躍している酒田舞娘が踊りを披露。出羽遊心館の檜舞台で、酒田市特別支援学校生徒が制作したアート作品を背景に、酒田舞娘の紹介を交えながら、酒田になじみのある「酒田甚句」やお座敷歌「ぎっちょんちょん」などの演目が披露された。

〇黒森歌舞伎　酒田市出羽遊心館
９月 20 日（月・祝）13：30~　来場者 35 名
酒田市社会教育文化課文化財係職員が、『神に捧げる地芝居～黒森歌舞伎の１年』、『黒森歌舞伎ポーランド公演の軌跡』と題して、黒森歌舞伎の魅力を動画上映を交えながら解説。その後、黒森歌舞伎妻堂連中の座員により、『義経千本桜　伏見稲荷鳥居前の場』の一節が上演された。

感想 （アンケートより）	■佐藤タカヒロ漫画原画展 〇漫画の原画をあまり見たことがないが、その美しさと迫力が凄くて感動した。 〇佐藤タカヒロ氏の入魂の原画をじっくりと鑑賞することができ、とても充実した時間を過ごすことができた。 〇原画をじっくりと見ることが出来てその細かさ、丁寧さに感動した。デスクを再現したコーナーもありとても良かった。 〇生原稿から声が聞こえてくるような登場キャラ達の圧倒的な迫力に息を飲んだ。 ■トークイベント「漫画家 佐藤タカヒロを語る」 〇作品の魅力を、自分の中で再発見できるようなエピソードが多く聞かれて良かった。原画展を再度鑑賞したい。 〇作家の温かい思い、周りの方々との人としての信頼しあい高めあう姿を感じることができた。 〇編集担当者との色々なやり取りを聞けて楽しかった。漫画を見ているだけではわからないような技術的な事も知ることができた。アシスタントの方とのお話もあり、貴重な話ばかりで満足した。 〇作品にも如実に反映されている、作家の漫画に対する真摯な姿勢を伺うことができた。 ■いいいろいろいろ展 〇出羽遊心館の和の世界に、作品がうまく展示されていて楽しく鑑賞できた。 〇案内図が美術展の図鑑のようで、読みごたえがあり、より鑑賞を楽しむことができた。 〇作品の素晴らしさはもちろんだが、展示の素晴らしさで作品がより一層輝いて感じた。 〇自分にはない感性に触れる事ができとても楽しいひと時でした。作者のコメントを読むことで作者の人物像を思い浮かべながら作品を鑑賞できた。 ■ワークショップ　【かわいくておいしい！アイシングクッキーを作ってみよう！】 〇最初は難しかったが、講師の指導で上手くできた。可愛くできて嬉しかった。 〇コロナ対策もしっかりしていて、親子で安心して楽しめる企画だった。 ■ワークショップ【しかけがいっぱい！コロコロ迷路をつくろう！】 〇子どもの自由な発想で大人でも楽しめた。 〇色々な材料も用意されていて、親子で思いっきり活動できた。 ■酒田吹奏楽団ミニコンサート 〇素敵な演奏で、もっと聴いていたかった。 〇コロナ禍で生のコンサートに行くことができず寂しく感じていたが、久しぶりに演奏を聴いて心が豊かになったと感じた。 ■酒田舞娘による演舞 〇初めて演舞を見たがとても素晴らしかった。郷土の誇りである。 〇演舞もお話も大変楽しかった。出羽遊心館を会場としたのも解放感がありとても良かった。

	■黒森歌舞伎上演 〇圧巻の演技に大変感動した。出端（でわ）と、おはやし部の迫力ある演奏・掛け声も素晴らしかった。 〇黒森歌舞伎を歴史と活動を解説してもらい、より興味を持った。引き続き応援していきたい。 〇間近で演技を見ることができて、衣装や化粧の美しさも鑑賞できて大変よかった。
成果と課題	〇様々なコロナ対策とそれによる制限を設けての実施であったが、参加者・入場者からは理解・協力をいただき、事業全体に対して概ね好評をいただいた。多種多様なアートを取り入れることにより、幅広い年代の方々を対象に、文化芸術にふれる機会の創出を図ることができた。 〇酒田市出身である漫画家佐藤タカヒロ氏、作家佐藤真生氏の作品を取り上げたことが、大変好評であった。今後も本市出身のアーティストを積極的に取り入れた事業展開を図っていきたい。 〇黒森歌舞伎や酒田舞娘は、コロナの影響で、それぞれ予定されていた公演、イベントの多くが中止・延期となったが、本事業で実施できたことで地域住民にその魅力と価値を発信する機会を設けることができたことは大変有意義であった。今後も伝統文化に焦点をあてた事業を継続することで、市民の関心・興味を喚起を図り、後継者不足の解消、活動の場の拡大、郷土愛の醸成、伝統芸能等の保存・継承に繋げていきたい。 〇地元で長年活躍する酒田吹奏楽団、黒森歌舞伎保存会、酒田舞娘から協力をいただくことで、幅広い客層に楽しんでいただける多種多様な公演内容となった。また東北芸術工科大学との連携で、昨年に続き実施した工作ワークショップ、地元のスイーツ作家の協力によるアイシングクッキー作りも大変好評であった。これらの連携・協力体制を継続していながら、本市の芸術文化事業の幅を広げていきたい。 〇いいいろいろいろ展については、コロナによる様々な制限のある中であったが、市内障がい者団体、やまがたアートサポートセンターら・ら・ら、酒田市社会福祉協議会、佐藤真生氏、アートディレクターの中島友彦氏と、お互い知恵を出し合い協力しながら、丁寧に展示会を作りあげることができた。 〇運営全般において、市民サポーターや、学生を含むボランティアからも広く協力をいただき市民協働を進めた。

<table>
<tr><td colspan="3">工藤俊幸氏による合唱指導</td></tr>
<tr><td colspan="2">基本的施策</td><td>2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備
3　学校教育における文化芸術活動の充実
4　将来の文化芸術の担い手の育成
5　文化芸術活動を支える人材の育成
10　文化芸術による社会包摂</td></tr>
<tr><td colspan="2">目　　的</td><td>指揮者の工藤俊幸氏から、合唱指導を受ける機会を提供し、市内中学生のモチベーションアップとレベルアップを目指す動機付けとなることを目指す。</td></tr>
<tr><td colspan="2">日　　時</td><td>10 月 12 日（火）午前 10 時 35 分～　：東部中学校
10 月 13 日（水）午後 1 時 35 分～　：酒田第二中学校
10 月 14 日（木）午前 10 時 45 分～　：酒田第六中学校
10 月 19 日（火）午後 2 時 35 分～　：酒田第一中学校
10 月 20 日（水）午前 10 時 45 分～　：鳥海八幡中学校
10 月 21 日（木）午後 1 時 30 分～　：酒田第三中学校</td></tr>
<tr><td colspan="2">対　　象</td><td>合唱指導を希望する市内中学校 3 年生</td></tr>
<tr><td colspan="2">会　　場</td><td>各中学校</td></tr>
<tr><td colspan="2">事業内容</td><td>工藤俊幸氏による合唱指導（クラス単位。各クラス原則 30 分間。）</td></tr>
<tr><td colspan="2">講　　師</td><td>工藤俊幸（指揮者）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">事業関係者数</td><td>参加者数</td><td>東部中学校 71 名、酒田第二中学校 96 名、酒田第六中学校 96 名、
酒田第一中学校 137 名、鳥海八幡中学校 74 名、酒田第三中学校 174 名</td></tr>
<tr><td>講師</td><td>1 名</td></tr>
<tr><td>スタッフ</td><td>2 名</td></tr>
<tr><td>総数</td><td>650 名</td></tr>
</table>

事業内容	酒田市出身で国立音楽大学客員准教授であり、指揮者として活躍している工藤俊幸氏が、市内中学校 6 校でクラス単位の合唱指導を実施した。 合唱指導の様子（酒田市立第二中学校 3 年 3 組：10 月 13 日実施） このクラスが選曲したのは、工藤直子さん作詞、木下牧子さん作曲の『はじまり』。生徒全員で 1 曲通して歌い、日々の練習の進み具合を確認するところから合唱指導を開始。その後、少しずつ歌いながら歌詞に込められた感情や情景を確認しながら、それを表現するための歌い方を指導した。 この曲の歌詞は、『畑があり、川があり、また畑があり、森などがあって、畑があり…』と始まり、景色の説明が続くことに対して工藤さんは具体的に次のようにアドバイスした。 「立ち止まって同じところにいるのではなく、自分が今立っている場所からどんどん景色を俯瞰していくような感じで歌ってほしい。テレビ番組でよく見るような、ドローンにカメラをつけて飛ばしたときの映像を思い浮かべると分かりやすいと思う。１つ目の畑よりも２つ目の畑の方が遠くにあることをイメージしながら、音をしっかり遠くへ伸ばして歌うことで、聴いている人にもその情景を伝えることができる」。 中学生にもイメージしやすい具体的で身近な表現を使ったアドバイスに、生徒のみなさんも頷いたりメモを取ったりしながら一つひとつの指導を吸収しようと熱心に耳を傾けていた。指導前後を比較すると、わずか 30 分という短時間での指導にもかかわらず、パートを越えて全員で曲のイメージを共有したことで合唱にまとまりが生まれ、聴いている人に曲の情景が伝わってくるような合唱に変わっていき、表現の幅が広がっている様子がうかがえた。

感想	【先生より】 〇プロの方の言葉ひとつひとつが、仕上げ期の生徒の心にストンと入ってきた。曲の想いや背景などから理解が深まると合唱が変わっていくのを実感した。 〇詩にこめられた想いなど担任ではうまく伝えられず困っていたところ、的確なアドバイスで感情のこもった歌に変化した。素晴らしい指導力。もう少し時間が欲しかったというのが率直な感想。 〇実際に芸術の世界で生きている人の伝え方、雰囲気を生徒たちも感じ取り短時間であっても普段よりも合唱と向き合えた。貴重な時間となっていた。 〇生徒の合唱への向き合い方が変わる、とても良い時間だった。クラス数のこともあり短時間だったのが残念だったが、工藤先生の伝え方もあり生徒も教職員も学ぶことが多くあった。
成果と課題	〇工藤氏の指導は、中学生にもイメージしやすい具体的で身近な表現が使われており、どの学校でも生徒の関心を引きつけながら、充実した指導時間を提供することができた。 〇各クラスが選曲した合唱曲の作者や、曲が書かれた時代背景、曲に込められた感情などを楽譜から丁寧に読み取り、合唱をとおしてそれらを表現しようとすることで、表現の面白さとその多様性を体感してもらうきっかけとなる機会を提供できた。 〇各校の先生も指導を見学することで、普段の指導の参考となる場になった。 〇実施時期が学校によっては合唱コンクール直前だったり、練習を始めたばかりで 1 曲通して歌えなかったりとばらつきがあり、指導時点での曲の仕上がりの差が大きかった。工藤氏のスケジュールを考慮しなるべく同時期での実施を目指したが、指導時間の要望の違いやコロナ禍での調整も相まって、すべての学校の希望に沿うことは難しかった。各校の実情に合わせた実施とすることができなかった。

山形交響楽団楽器クリニック		
基本的施策		2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 4　将来の文化芸術の担い手の育成 10　文化芸術による社会包摂
目　　的		県内唯一のプロオーケストラである山形交響楽団の奏者から楽器の奏法について基礎から学ぶことで、レベルアップを目指す。
日　　時		令和 3 年 11 月 28 日（日）
対　　象		飽海地区吹奏楽連盟に所属する中学校・高等学校の吹奏楽部員
会　　場		酒田市総合文化センター
事業内容		○楽器ごとの奏法指導 ○吹奏楽の全体合奏指導 ○アンサンブルの奏法指導
講　　師		山形交響楽団員
事業関係者数	参加者数	午前の部でクラリネット、トロンボーン、ホルン、午後の部で打楽器、チューバ、フルートの指導が行われ、中学校 6 校と高等学校 1 校から合計 59 名の生徒が参加した。
	講　師	6 名
	スタッフ	4 名
	総数	69 名

事業詳細	市内中学校、高等学校の吹奏楽部員を対象に、山形交響楽団の奏者による楽器クリニックを実施した。 午前の部でクラリネット、トロンボーン、ホルン、午後の部で打楽器、チューバ、フルートの指導が行われ、中学校 6 校と高等学校 1 校から合計 59 名の生徒が参加した。 トロンボーンクリニックの様子　講師　太田翔子氏 　中学生 10 名と高校生 1 名が参加した。最初にマウスピースとチューナーの使い方、ピッチの取り方を説明し、その後「トロンボーン奏者の一日の練習の流れ」を説明。 　毎日の練習で、最初にすることはマウスピースを使ってのウォーミングアップであり、口先だけで鳴らすのではなく、厚く息を吹き込んで鳴らすようにとの説明があった。 　その次は楽器全体に丁寧に深く息を入れてロングトーンの練習。その際、低音を積極的に練習することで、結果的に高音もよく鳴るようになる、とのアドバイスがあった。 　音の出し方について、生徒一人ひとりの演奏を確認した後、音の始めが弱く不安定になりがちだが、最初から目指す音量でしっかり鳴らせるよう、丁寧に練習を繰り返すように、との話もあり、参加生徒は、先生のお話をメモを取りながら熱心に聞いていた。 クラリネットクリニックの様子　講師　川上一道氏 中学生 10 名（内 2 名はバスクラリネット）が参加した。 　最初に楽器の調整のため、川上氏が実際に参加者の楽器に 1 本ずつ触りながら状態を確認し、普段の手入れについてアドバイスを行った。

	続いては息の吸い方や、正しいアンブシュア、長時間演奏しても疲れない姿勢についての説明があり、その後実際に参加者全員が半音ずつ下がりながらロングトーンを行った。 半音階のロングトーンは演奏の基本であり、繰り返し練習することで低音から高音まで幅広く安定した美しい音色となるため、毎日丁寧に行うようにとの話に、生徒たちは頷きながら聞いていた。 楽団員の分かりやすく丁寧な指導と高い演奏技術にふれ、参加生徒は、目を輝かせながら生き生きと演奏していた。 講習が終わった後も自主的に普段の練習での悩みなどを質問しにいく生徒もおり、プロの演奏家から積極的に学ぼうとする姿が見られた。
参加者の感想	○奏法の基礎、アンブシュアを学ぶことができて、普段の基礎練習でもやってみようと思った。自分にまだ足りないところを改めて知ることができた。 ○音色がこんなにも変わるんだなと思った。とても勉強になった。 ○楽器の持ち方、口の形、スタッカートなど基本のこともしっかりと見直すことができて良かった。自分の悪い所もしっかり見つけることができた。 ○今まで知らなかったことを知り、以前より少しはレベルアップできたと思う。ポイントを意識して今後の演奏に活かしていきたい。 ○毎日する基本的な練習方法でどんなことをしたらいいのか、どんな風に吹けばいいのかなど、とても勉強になった。
成果と課題	○県内唯一のプロのオーケストラである山形交響楽団の奏者に、間近で奏法を習う貴重な機会となった。 ○感染症対策のため、１楽器 10 名の定員となり、残念ながら受講できない生徒もおり、コロナ禍での対応に苦慮した。 ○学校に講師が赴くのではなく、他校の生徒と一緒にクリニックを受講することで、生徒同士の交流も生まれ良い刺激になったように感じた。

宝くじ文化公演 （HAPPY JAZZ HOUR）		
基本的施策		2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 10　文化芸術による社会包摂 15　文化施設の活用
目　　的		広く市民が親しみやすい分野で人気の高い公演を、宝くじ文化公演事業を活用することで、多くの市民に鑑賞の機会を提供する。
日　　時		令和 4 年 2 月 24 日（木）午後 5 時 30 分開場　午後 6 時 30 分開演
対　　象		県内在住の方 ※未就学児を除く。
会　　場		希望ホール大ホール
事業内容		宝くじ文化公演事業を活用したコンサート
出 演 者		渡辺香津美（ジャズギター）、須川展也（サクソフォン）、 奥村愛（ヴァイオリン）、井上陽介（ベース）、奥村愛ストリングス 8 名
事業関係者数	参加者数	一般　531 名、高校生以下　11 名、招待　3 名 （コロナ対策のため、50%販売）
	出演者	12 名
	スタッフ	19 名
	総数	557 名

事業詳細	日本を代表するギタリスト・渡辺香津美、日本最高峰のサクソフォン奏者・須川展也、人気ヴァイオリニスト・奥村愛、実力派ベーシスト・井上陽介、奥村愛ストリングス８名によるジャズコンサートを実施。 「A列車で行こう」「シング・シング・シング」など、世代を超えて愛されている名曲を演奏した。
感想	【お客様より】 〇ギターのすごさを実感した。びっくりした。 〇コロナ禍でイベントが中止になる中、生のコンサートを聴く素晴らしさを再認識した。生活に豊かなうるおいが醸し出された。コンサートはぜひ続けてほしい。私たちの日常にはなくてはならない大切なものだ。 〇（須川さんへ）高校吹奏楽部に所属していてアルトサックス吹き。須川さんの魅力あふれる表現方法をいつも動画サイトで参考に拝見している。 〇何年ぶりかのコンサートで大変刺激になった。 〇第一線で活躍している人の音楽がリーズナブルに聞けるので大変良い。 〇コロナ禍で鬱々としていた気持ちが晴れて違う世界に連れて行ってもらったようだった。プロの生演奏が聴けて感激した。
成果と課題	〇宝くじの助成による安価な料金で実施することで、多くの市民に第一線で活躍しているアーティストの生演奏を聴く機会を提供できた。 〇憧れのアーティストの演奏を間近で聴くことで、同じ楽器を演奏している方のモチベーションアップや音楽への理解を深めることにつながった。 〇市民が親しみやすい分野で人気の高い公演を実施することで、今までホールに来館したことのない市民が来場するきっかけになった。 〇コロナ禍ということもあり、アンケートからは、生演奏にはふさぎ込んだ気持ちを明るくさせる力があると再確認した旨のコメントが多く寄せられ、鑑賞事業の必要性を市民が意識することにつながった。 〇宝くじ文化公演は毎年実施できる事業ではないため、こうしたコンサートを継続してほしいという声にどのように応えていくかが課題である。

サポーター向け研修事業報告書

基本的施策		4　将来の文化芸術の担い手育成 5　文化芸術活動を支える人材の育成 6　市民との協働・共創による事業展開
目　　的		本市の文化芸術事業の様々な場面で、その運営に協力し支えとなって活躍する、サポーター人材を育成する。
日　　時		第１回　７月２２日（木・祝日） 第２回　８月７日（土） 第３回　１０月３０日（土）※３回全て　１４時～１６時３０分
対　　象		希望ホールサポーター登録者 酒田市社会教育文化課文化芸術係職員
会　　場		希望ホール
事業内容		実際のホール運営を体験しながら、レセプショニスト（コンサートホールの受付や案内を担当するスタッフ）としての心構えや実技を学ぶ研修会
講　　師		昭和音楽大学講師 角屋里子氏
事業関係者数	参加者数	第１回　１４名 第２回　１１名 第３回　１０名
	講　　師	各回　１名
	延べ人数	３８名

事業詳細	講師の角屋氏は東急百貨店サービス課、秘書課、営業本部、人事教育を経て、1989 年 5 月、株式会社東急文化村出向、同年 9 月オーチャードホールオープン後、2006 年 6 月迄、オーチャードホールマネージャーとして、自主公演、貸館公演の接客、社員・レセプショニストの教育に携わった。フィリアホール、大分県文化スポーツ振興財団、アルゲリッチ芸術振興財団、兵庫県立芸術文化センター、京都市音楽芸術文化振興財団、東急シアターオーブ、等の職員・レセプショニストの研修の講師、オープニングの立会い、公益社団法人全国公立文化施設協会の接遇研修の講師も務めるなど、現在全国のホール・公共施設において人材育成に携わっている。 〇第１回　入門編（７月２２日　14：00～16：30） ・新型コロナウイルス対策・基本的な考え方 ・レセプショニストとしての接遇の心構えと基本業務、説明 ・おもてなしの心を具体的に表現（姿勢・表情・声・態度・お辞儀の仕方） ・主な業界用語の説明 ・客席案内（開場中の席の案内） ・館内案内(ロビー・ホワイエ案内、扉の開閉、座席案内、施設案内) ・入口周辺での対応 ・もぎりでのロールプレイング ・公演の流れと係員の行動 〇第２回　基本編（８月７日　14：00～16：30） ・開演後の遅れ客の対応（基本と応用） ・開演中の客席案内(ペンライト使用での自席対応・空き席対応) ・お体の不自由な方の対応 ・病人、けが人対応 ・遺失物、拾得物の対応 ・終演時、終演後の対応 〇３日目　応用編（10 月 30 日　14：00～16：30） ・トラブル、クレーム対応 ・火災、地震の時の対応 ・公演シミュレーション

感想 （アンケートより）	○内容が充実していた。知らないことを知ることができたし、少しでも身につけることができた。 ○実用的な内容を学ぶことができた。講師の実体験の踏まえた説明が大変参考になった。 ○実際の場面をシミュレーションで体験できたことが、有意義だった。慣れない言葉遣いや動作に最初は戸惑ったが、講師の丁寧な分かりやすい指導で理解できた。 ○レセプショニストの役割・重要性を改めて実感した。研修で学んだことを、本番の公演等で役立てたい。
成果と課題	○経験豊富で実績のある講師の、丁寧で分かりやすい指導により、最初は戸惑っていた受講者も繰り返しシミュレーションを行うことで徐々に慣れ、積極的に技術の習得に取り組んでいた。３回の研修を経た後、サポーターから新野将之パーカッションリサイタルより６公演に協力を頂いたが、今年度の研修で学んだことを十分に生かしながら、レセプショニスト業務に従事することができた。 ○サポーターに関する事業を継続することで、本市の文化芸術事業への理解を深め、応援し支える人材を増やし、将来的に地域を盛り立てるための人材の育成を目指すとともに、参加者からの情報発信により、本市の文化芸術事業の魅力を広く知らしめたい。 ○令和４年度以降は、新たにレセプショニストの養成を実施することで、より質の高い舞台芸術を提供できる環境の実現を図り、本市の文化芸術の拠点である希望ホールのブランディングに繋げていきたい。

荘銀タクト鶴岡との連携について	
基本的施策	2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 5　文化芸術活動を支える人材の育成 12　多様な分野との連携及びネットワークづくり
目　　的	酒田市文化芸術推進計画における基本的施策の推進について、令和３年度酒田市文化芸術推進審議会答申書において、「連携体制の強化」と、「人材の育成」が課題としてあげられている。 以上課題について、職員の人材交流・参加者同士の交流・参加者と職員の交流、また双方の事業を知ることで、幅広い事業制作を学ぶ実施研修の位置づけなどを目的として、近隣公共ホールにおいて、自主制作事業を実施している荘銀タクト鶴岡（以下「タクト」）との事業連携を開始した。
内　　容	○酒田市と鶴岡市は通勤圏内であり、民間の様々な活動において市民が行き来している現状がある一方、公共施設や自治体間の連携はこれまで殆ど行われてこなかった。人口減少が加速度的に進む中、将来的には芸術・文化活動を通じた庄内全体の活性化を目指し、第一弾として『Dance Connect Shonai』（庄内をダンスでつなごう！）と題し、双方で企画するダンス事業の、 ①WS の相互参加 ②事業連携（双方の事業にスタッフとしての協力） ③合同チラシを制作するなどの広報連携（経費折半・庄内地域全体のブランディング） などを行った。 まずは令和３年２月にタクトで開催された、中村蓉氏が出演する市民参加ダンス公演の事前ワークショップに酒田市職員が参加。市民やアーティスト、タクトのスタッフとの交流が行われた。その交流を通じて、市民デザイナー・市民ダンサーとの出会いがあった。 ○音楽事業においては、タクトを会場として「高橋多佳子ピアノ・リサイタル庄内公演 in 鶴岡」を共催事業として実施。同酒田公演と合わせて、両館で広報協力を行うとともに、タクト公演については、タクトの市民レセプショニストを含めた両館のスタッフの交流が図られた。 ○その他、双方で実施した研修事業の相互参加や事業視察などを行った。

成果と課題	○本市のダンス事業実施の前に、荘銀タウト鶴岡の事業においてアーティストとの直接の交流があったことで、今年度の酒田市のダンス事業に対してアーティストや助成団体とのコミュニケ―ションが昨年度から円滑に進めることができた。その結果、酒田特別支援学校へのアウトリーチや広報連携などが実現。コロナ禍において、また地方では中々観ることが出来ないダンス公演にも関わらず、ワークショップや公演の集客など、様々な面で連携の重要性を改めて感じることができた。 ○市民デザイナー（酒田市民）には酒田市の事業の新しい広報パートナーとして他の事業チラシの制作についても依頼。本市の事業の広報戦略に大きく貢献いただいており、アーティストからも高い評価をいただいている。 地域のクリエイター発掘、育成という成果にも繋がっている。 ○市民ダンサーが酒田特別支援学校アウトリーチにアシスタントとして参加していただいたことは、将来的にアーティストと地域を繋ぐ市民コーディネーターの育成のきっかけにもなり、さらに事業の効果を高める結果となった。 ○音楽事業においては、同酒田公演・鶴岡公演には市外・県外から来場された方も数多く、来場者からは「初めて希望ホール/荘銀タクト鶴岡に来た。両館の魅力を知ることができた」、「2 館の響きを聴き比べでき、とても満足した。充実したコンサート内容だった」などの声があった。両館のブランディング、庄内地域全体の交流や活性化にも大きく繋がる取り組みとなった。 ○音楽、ダンス以外でも研修の相互参加や事業視察など、継続的、発展的な連携、協力が実施できた。 ○本市では「市民との連携」・「市民コーディネーター育成」を計画に据えているが、今回の取り組みから本市の課題解決の糸口が見つかるものと考え、今後もタクトを含め様々な関係者・関係団体と連携を丁寧に進めながら情報共有を積極的に図っていきたい。なお、来年度以降は音楽、ダンス、演劇、人材育成等幅広く連携を行う予定である。

希望ホール（酒田市民会館）ホームページ刷新、他情報発信について	
基本的施策	2　誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備 20　市民の視点にたった情報発信・広報戦略
目　　的	○これまで希望ホールホームページは、平成 16 年 6 月の開設以降 17 年が経過し、その間、市民をはじめとするホームページ利用者の増加や閲覧環境の変化により、ウェブアクセシビリティやセキュリティの観点からも、求められるニーズに対応できない状況が続いていた。そこで令和 3 年度、ホームページ利用者の利便性向上を目的として、魅力あるホームページデザインの見直しを行うとともに、スマートフォンやタブレット端末などへの対応が可能な内容に刷新することとした。 ○活動内容のアーカイブ化 ○ＳＮＳ等との連携
内　　容	◎更新方針ついて ○活動内容をレポートするなど、ホールの取り組みやビジョン、魅力や特色を可能な限り可視化し、市内外へ効果的に発信できるホームページであること。 ○ウェブアクセシビリティを遵守し、利用者が必要とする情報に簡単にたどりつき、より多くの情報を提供できるホームページであること。 ○スマートフォンやタブレット端末などに対応したモバイルファーストを意識しレスポンシブルデザインを取り入れること。 ○どの職員も簡単に情報を掲載し、迅速に情報発信できるホームページであること。 ○閲覧数などのデータを収集できること。 ◎業務委託事業者選定について 当業務の専門性を考慮し、より企画力・提案力のある事業者に業務を委託するため、公募型プロポーザル方式により選定を行うこととした。３社がプロポーザルに参加した。 ○令和3年6月29日　　審査委員会にて受託候補者を選定 ○令和3年7月26日　　契約 ○令和3年12月17日　　新ホームページ公開

成果と課題	○レスポンシブルデザインを導入したことで、スマートフォンやタブレット端末などへの対応が可能となり、利用者の操作性が格段に向上した。 ○デザイン等を大幅に見直したことにより、トップページから始まり全ページに渡って希望ホールの魅力を発信できる内容となった。また、利用者の利便性向上を念頭に置き、カテゴリーの分類を全般的に修正した結果、利用者が公演情報等、必要な各情報に適確にたどり着けるようになった。加えて、ページの作成及び更新・修正が容易に行えるようになったため、希望ホールからの迅速な情報発信が可能となった。 ○更新後、利用者からは、 ・ホームページから事業の魅力が良く伝わり、参加したくなった。 ・いろいろな事業内容が、分かりやすく掲載されており、希望ホールの事業全般に興味を持った。 ・利用者の立場に立った、見やすく、使いやすいホームページである。希望ホールへの印象が 180 度変わった。 との声をいただいた。ホームページを刷新し、活動レポート、ＳＮＳ連動などを行ったことで、事業参加者数・リサイタル来場者数の増加に大きく貢献したとともに、希望ホールのブランディングに繋がったものと考える。 ○これまでは、活動した内容が一切アーカイブされておらず、特に学校へのアウトリーチなど、一般の鑑賞が困難な現場での活動を周知することができていなかったが、事業活動をレポートとして公開することにより、事業の可視化を図ることができた。 ○これまでの情報発信ツールは、旧ホームページと市の広報誌のみ、という状況に対して、ＳＮＳ（Twitter）を開始し、ホームページと連動することで情報発信を強化した。 ○コンテンツ毎の内容の充実を図り、希望ホールの活動内容・事業内容を広く多くの市民・利用者に分かりやすく発信し続けることで、希望ホールへの興味・親近感・愛着を持っていただくとともに、より希望ホールのブランディングに繋げていきたい。 ○ホームページ閲覧についての、アクセス解析が可能となったことにより、今後はそこから得られるデータを活用し、より効果的な情報発信を行うことで、市民への情報発信の充実を図っていく。 ○ホームページ更新に伴い、Twitter の発信も開始したことで、情報発信の幅が大きく広がった。情報発信については未だ課題が多く、ＳＮＳの活用はもちろん、幅広い利用者に対して、今後も希望ホールの魅力を継続的に発信していきたい。